田井座遺跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1995年3月

長野県飯田市教育委員会

田井座遺跡（たいざいせき）

店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1995年3月

長野県飯田市教育委員会

序

最近、新聞に考古学関係の記事がよく見受けられます。各地で発掘調査が行われていることの現れ、言い換えればそれだけ開発が進んでいるのだとも取れます。この飯田市においても公共事業や民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は年々増加しております。地域社会が発展することは喜ばしいことですが、今日まで伝承されてきた文化財を後世に残し伝えていくこともまた大切なことと考えます。

実施される発掘調査からは、先人たちの生活の様子を示す事実がつぎつぎと確認されております。これらの事実ひとつひとつの積み上げが地域の歴史再構築に大きな役割を果たすことはいうまでもなく、破壊せざるを得なかった文化財を後世に伝える方法でもあるわけです。

今回発掘調査を実施した田井座遺跡は、飯田市鼎一色地籍にあり、国道153号飯田バイパス（俗称アップルロード）沿いで、近年急速に商業地化している場所です。この地でも何か所かの発掘調査が行なわれ、縄文時代から中世までの遺構がたくさん確認されています。

今回の調査でも、弥生時代後期の住居址を複数確認し集落の一部であることが判明しました。今までの調査結果と併せて考えると弥生時代後期にはこの一帯に40軒以上の数の住居が集まった大集落の存在が浮かびあがりました。

内容については、本文中に記したとおりであり、今後の研究に供されることを希望しております。

発掘調査は、その結果として文化遺産の破壊になるわけです。できることならば、現在までそうであったように、残っているままの姿で後世に継承していくことが私たちの責務だといえます。しかし、現在生きている私たちにも生活があり、地域全体における今日的な課題解決の必要もあるわけです。地域社会の発展と文化財保護が調和のとれた地域にすることがこれからの重要な課題だと考えます。

最後になりましたが、調査実施にあたり、その趣旨を深いご理解をいただいた株式会社コナカをはじめとする関係各位と、発掘作業・整理作業に従事した調査関係者の皆様に心よりの感謝を申し上げて、刊行の言葉といたします。

平成７年３月

飯田市教育委員会

教育長　小　林　恭之助

例　　言

1．本書は飯田市鼎一色地籍における株式会社コナカの店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地田井座遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は株式会社コナカの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．発掘調査は平成5年4月5日～平成5年4月27日まで現地作業を実施した。整理作業及び報告書の作成作業は平成6年度に実施した。

4．発掘調査及び整理作業では、遺跡名の略号は以前に発掘調査を実施した時に使用したTIZに地番の127を付けTIZ127とした。

5．本調査における調査区の設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づき、株式会社ジャステックに委託した。（詳細については1994年飯田市教育委員会発行の『中村中平遺跡』を参照のこと。）なお、今回の調査位置はLC－84　13－17に当たる。

6．本書の記載順は、竪穴住居址・掘立柱建物址・竪穴・土坑・墓・溝址・柱穴の順に記述し、時代毎に分けた。

7．遺構番号については、隣接地で調査を実施した周辺調査で検出された遺構番号と連続して用いた。

8．本書の記載は、遺構図を本文に併せて挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

9．本書は吉川豊が執筆した。なお、本文については小林正春が加筆・訂正を行なった。

10．本書の編集は、調査員全員で協議により行ない、小林正春が総括した。

11．本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目　　次

序……Ⅰ
例　　言……Ⅱ
目　　次……Ⅲ
Ⅰ　経過……1
　発掘に至るまでの経過
　試掘調査の経過
　発掘調査の経過
　整理作業の経過
　調査組織
Ⅱ　遺跡の環境……3
　自然環境
　歴史環境と周辺遺跡
Ⅲ　調査結果……9
　(1)竪穴住居址……9
　　①縄文時代
　　47号住居址
　　②弥生時代
　　39号住居址　41号住居址　42号住居址　43号住居址
　　44号住居址　45号住居址　48号住居址　49号住居址
　(2)掘立柱建物址……16
　　①時期不明
　　掘立柱建物址13　掘立柱建物址14
　(3)竪穴……19
　　①中世
　　竪穴10　竪穴14
　　②時期不明
　　竪穴15
　(4)土坑……20
　　①縄文時代
　　土坑63　土坑65　土坑67　土坑68　土坑69　土坑70

②時期不明
土坑62
(5)墓……23
①弥生時代
方形周溝墓10
②中世
土壙墓1
(6)溝址……25
①時期不明
溝址33　溝址34　溝址35　溝址36　溝址37　溝址38
(7)周辺ピットおよびその他の遺構……29
(8)遺構外出土遺構……29
Ⅳ　まとめ……35
Ⅴ　引用参考文献……37
Ⅵ　図版……39
Ⅶ　写真図版……49
Ⅷ　報告書抄録……63

Ⅰ 経　　過

1．発掘に至るまでの経過

株式会社コナカは、飯田市鼎地区に紳士服に量販店を建設することを計画した。場所は国道153号飯田バイパスと運動公園通りが交差する北側の果樹園であった。その付近には、すでにいくつかの店舗が建設されており、運動公園通りをはさんで『サンプラザアップルロード店』があり、この店舗建設に先立って行われた埋蔵文化財包蔵地「田井座遺跡」では住居址等が確認されている。したがって建設予定地も包蔵地の一部と見られることから、工事実施前に現地協議を実施することとした。

協議は、長野県教育委員会文化課の担当指導主事、飯田市教育委員会社会教育課職員および開発主体者であるコナカと工事施工業者である株式会社南建の担当者との間で実施した。その結果、開発用地全域の試掘を実施し地下の様子を調べ、その結果に基づき再度協議することとなった。

2．試掘調査の経過

用地は段状に整地された果樹園と水田で3段にわかれており、上物はすでに片付いていた。12月21日に重機により運動公園通りと平行に3本のトレンチをあけ、25日から作業員による遺構の確認を実施した。一部整地により削平された場所がありすぐに地山であるロームがあらわれた。耕土の下は暗褐色の土が堆積しており、その下層が地山であった。トレンチ開坑時からこのロームを切って存在する遺構を確認していたが、排土の除去を行なった結果、住居址を確認したため、再度協議を行ない、遺跡の記録保存を実施することになった。

しかし、最下段の水田は盛土をし、駐車場とするため、調査は建物が建つ箇所のみとした。

3．発掘調査の経過

再協議をうけ調査に入った。3月20日から重機による表土剥ぎを実施した。果樹園にはリンゴの枝があったためバックホーとともにホイールダンプを使用して土の運搬も行なった。地山までの深さはどの地点でもほぼ一定であった。

表土剥ぎ作業終了後の4月5日から作業員を使い遺構検出と遺構掘り下げを実施した。ベルコン等の機械を使用し、より効率的な作業実施に努めた。その結果住居址は9軒・掘立柱建物址2棟・溝6本・竪穴3基等の遺構を調査した。その後、写真撮影と遺構の実測を委託で、併せて炉のたちわりを行ない4月27日に現地での作業すべてを終了した。

4．整理作業の経過

平成6年度に入ってから整理作業を行なった。飯田考古資料館に持ち帰った遺物の洗い、注記、接合、復元作業を順次行なうと共に、図面や写真類の整理作業も実施した。遺物は出土量の割に完形になるものは少なく、石器類も比較的少なかった。遺物の実測は復元の終了を待って行ない、それに平行して遺構図のトレースを実施した。原稿執筆、図版組みを行ない報告書の刊行となった。

5．調査組織

(1) 調査団

調査担当者	小林 正春　馬場 保之
調査員	伊藤 尚志　佐合 英治　佐々木嘉和　渋谷恵美子　下平 博行 福沢 好晃　山下 誠一　吉川 金利　吉川 豊
作業員	市瀬 長年　今村 春一　後藤 好市　後藤 元子　坂下やすゑ 塩沢 澄子　田中 富治　滝上 正一　中平 隆雄　西尾 俊貴 畠山 英夫　福沢トシ子　松下 直市　森 章　矢澤 博志 矢沢 房子　柳沢 謙二　湯田 直人　依田 時子　吉川 正実 新井 幸子　新井ゆり子　池田 幸子　岡田 紀子　金井 照子 金子 裕子　唐沢古千代　川上 一子　木下 早苗　北原久美子 木下 玲子　鞠原 勝子　小池 千津子　小平不二子　小林 千枝 佐々木真奈美　佐々木美千枝　佐藤 知代子　斎藤 徳子　関島 真由美 田中 恵子　中島 真弓　丹羽 由美　西山あい子　萩原 弘恵 平栗 陽子　福沢 幸子　古根 素子　古林登志子　牧内喜久子 牧内 八代　松沢美和子　松島 直美　松本 恭子　三浦 厚子 水落佳代子　南井 規子　宮内真理子　森藤美知子　吉川 悦子 吉川紀美子

(2) 事務局

飯田市教育委員会

安野 節	飯田市教育委員会社会教育課長	(平成5年度)
横田 穆	〃	(平成6年度)
原田吉樹	飯田市教育委員会社会教育課文化係長	(平成5年度)
小林正春	〃	(平成6年度)
山下誠一	飯田市教育委員会社会教育課文化係	(平成6年度)
吉川 豊	〃	
馬場保之	〃	
渋谷恵美子	〃	(平成5年度)
吉川金利	〃	
下平博行	〃	
伊藤尚志	〃	(平成6年度)
福沢好晃	〃	
岡田茂子	飯田市教育委員会社会教育課社会教育係	

Ⅱ　遺跡の環境

1．自然環境

田井座遺跡は飯田市鼎一色地区に所在する。飯田市は西に木曽山脈、東に赤石山脈と伊那山脈に挟まれた伊那谷の南部、天竜川による河岸段丘と断層活動による段丘が著しく発達した地域である。飯田市域では、この段丘がさらに大小の支流により開析され、扇状地、河岸段丘、小盆地が複雑に入り組み、変化に富んだ地形が形成されている。

鼎地区は天竜川の支流松川の形成する氾濫原と河岸段丘の上に広がる地域である。市街地から見れば松川を挟んで南西約２kmに位置している。

田井座遺跡は、松川が形成した河岸段丘の最上位段丘に属する一色・名古熊段丘面上に位置する。遺跡の南側には、毛賀沢川が深く谷を造り伊賀良との境を成している。河岸段丘を低位段丘と中・高位段丘をわける比高差約25mの段丘崖がある。また、松川よりの北側にも比高差約10mの段丘崖があり、段丘面の範囲を区切っている。この段丘は松川上流へ向ってその幅が狭くなるのに対し、下流へはその幅を広げている。南側の段丘崖直下には湧水があり湿地帯を形成している。遺跡の中心は段丘中央を東西に伸びる舌状の台地上に広がっていることが今までの調査により確認されている。

調査区内の基本層序を見ると砂と花崗岩を含む黄色砂土がこの微高地の基盤をなし、遺構の覆土は褐色土である。その上部には耕土があるのみでかなり浅い。西側のごく一部は湿地であり、耕土の下にかなり厚い黒色土が堆積する。

2．歴史環境と周辺遺跡

日向田遺跡の所在する鼎地区で確認されている最も古い遺跡は、ナイフ形石器が出土している天伯Ｂ遺跡と猿小場遺跡ではあるが、いずれも断片的な資料にすぎず、遺構の確認はできていない。鼎と同一段丘上に位置する八幡原遺跡でも削器の出土が報告されている。

縄文時代早期の遺物である、押型文系土器と条痕文系土器を出土した遺跡としては天伯Ａ遺跡、六反畑遺跡がある。しかし、量はごくわずかで、やはり遺構の確認はされていない。縄文時代前期の集落址を確認した遺跡としては、上位段丘に位置する田井座遺跡と前述の八幡原遺跡がある。縄文時代中期の集落址は、天伯Ａ遺跡・柳添遺跡で確認されている。後期・晩期の遺物のみが出土している遺跡には、六反畑遺跡・猿小場遺跡・天伯Ａ遺跡がある。

弥生時代の遺跡の数は増える。猿小場遺跡・山岸遺跡・田井座遺跡・一色遺跡などがある。そのなかでも田井座遺跡は後期中島式土器の時代の大集落址であることが確認されている。毛賀沢川を挟んで西側の段丘上に広がる殿原遺跡も同時期の大集落である。

挿図1　調査遺跡位置図

古墳時代の集落の調査は比較的多く、黒河内遺跡・柳添遺跡・六反畑遺跡・山岸遺跡・天伯B遺跡がある。古墳は消滅したものも含めて鼎地区内に14基が知られている。しかし、詳しく調査されたものは天伯1号古墳・2号古墳と物見塚古墳にすぎない。前者は後期の古墳であり、後者は割竹形木棺を有する竪穴式の主体部をもつ5世紀後半の古墳であることが判明した。その他に形態が把握できているものには、横穴式石室が露出した鞍骨古墳があるだけで、他の10基は実態がつかめていない。

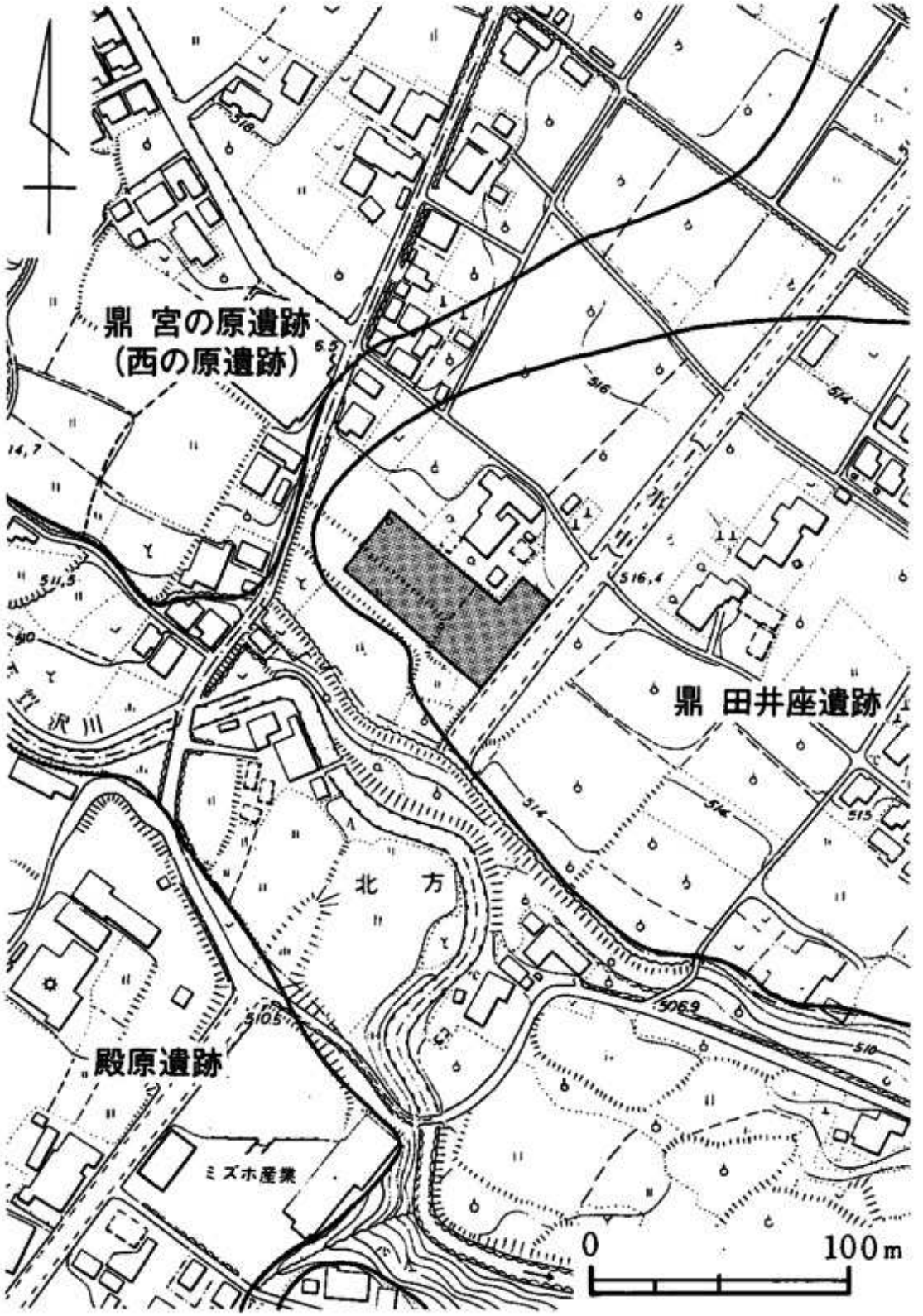
隣接する松尾地区にはかなりの数の古墳がある。松尾上位の段丘は鼎地区とつながった箇所が多く、なんらかの関係を持っていたと考えられている。八幡原遺跡に存在する方形周溝墓群は弥生時代終末から古墳時代まで造り続けられていることが確認できるとともに、この地方では珍しい方墳である妙見山古墳も存在していた。さらにその一段下の段丘縁部にある茶柄山古墳群も5世紀代のものである。この時代における飯田地方の墓制を考えるにおいて、重要な遺跡がここに集中している。

奈良・平安時代には、官道である『東山道』の『育良駅』が隣の伊賀良にあったとされ、座光寺恒川の郡衙へと続くことから、この地区内のどこかを通過していたはずであるが、その箇所はまだ確定できていない。また、全国で起こった荘園の発生はこの地でも例外ではなく、鼎地区は伊賀良の荘に含まれていた。

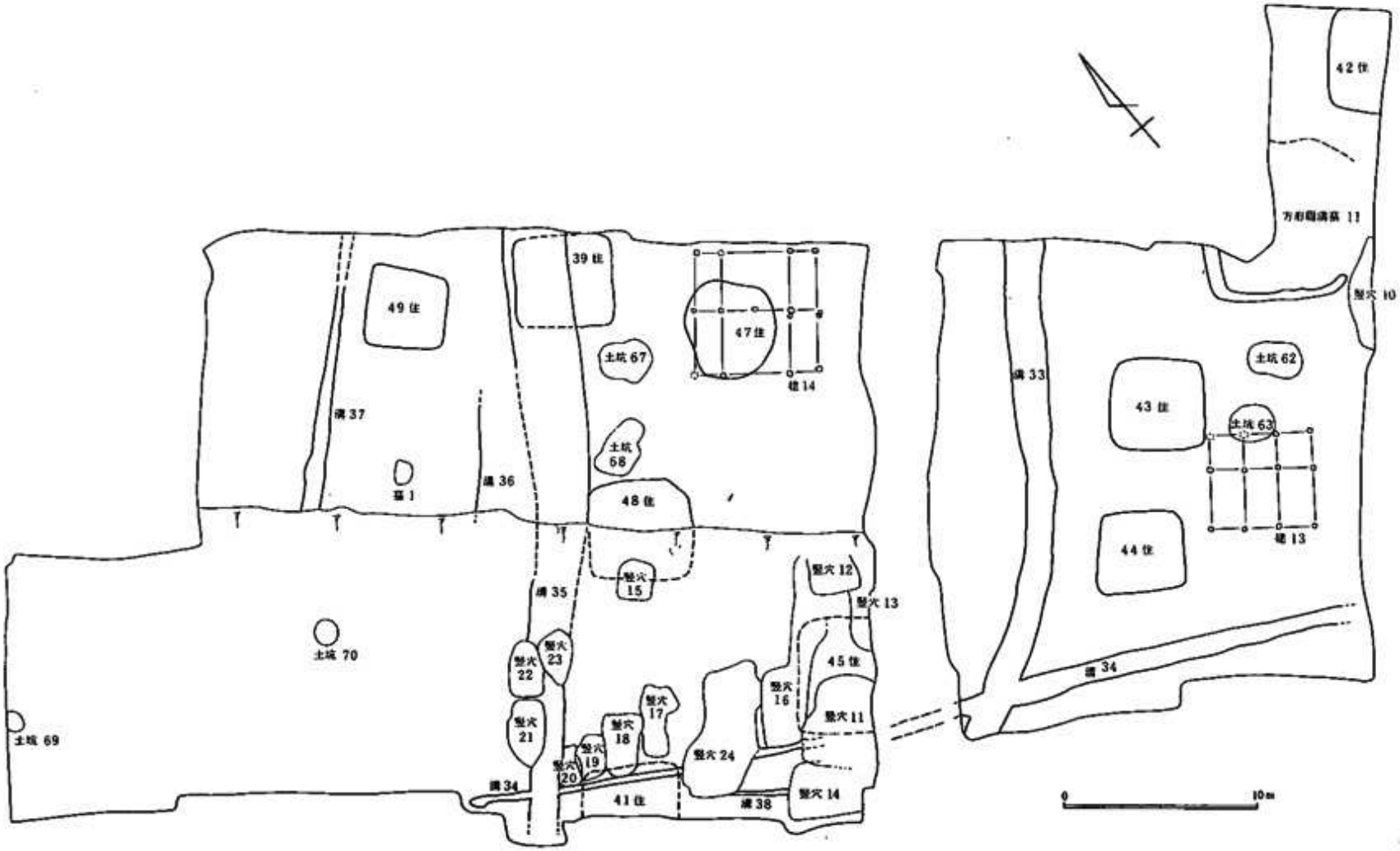
平安時代の集落としては猿小場遺跡と隣接する矢高原遺跡に大規模なものを確認し、さらに日向田遺跡でも集落が確認できた。また、八幡原遺跡にも住居址の存在が確認された。

中世の遺物は全域で採集できるが、とくに上位段丘の名古熊は松尾城跡に関係する館等の所在も知られており、量が他の地区に比べ多い。特筆すべき資料としては、田井座遺跡で確認した竪穴遺構がある。これは、4×2mの長方形のもので中に径1mの穴が3個あり、常滑焼きの大甕を伴っている。しかし、性格は不明のままである。さらに、切石山の洞地籍の村沢宅に伝わる古瀬戸の四耳壺は蔵骨器と見られるが、出土遺構がはっきりしていないため、よくわからない部分もある。鼎と松尾の境にある上の城跡にはこの時代の墓が確認され古瀬戸灰釉四耳壺が出土した。

鼎下茶屋地区には伊久間街道と秋葉街道の分岐点がある。当時の面影を残す街道筋には江戸時代に建てられた道標が残っている。中馬道として発達した久米街道（三州街道、現国道153号）も通過していたが、あくまでも通過地点でしかなく茶屋町の形跡がかすかに残っている。



挿図2　調査位置及び周辺遺跡図


42住
方形周溝墓 11
竪穴 10
土坑 62
溝 33
43住
土坑 63
44住
建 13
溝 34
39住
49住
47住
土坑 67
建 14
溝 37
土坑 68
墓 1
溝 36
48住
竪穴 15
竪穴 12
竪穴 13
溝 35
土坑 70
竪穴 23
竪穴 22
45住
竪穴 16
竪穴 11
竪穴 17
竪穴 18
竪穴 21
竪穴 19
竪穴 20
竪穴 24
土坑 69
溝 34
41住
溝 38
竪穴 14
0
10m

挿図3　遺構分布図

Ⅲ　調査の結果

(1)竪穴住居址

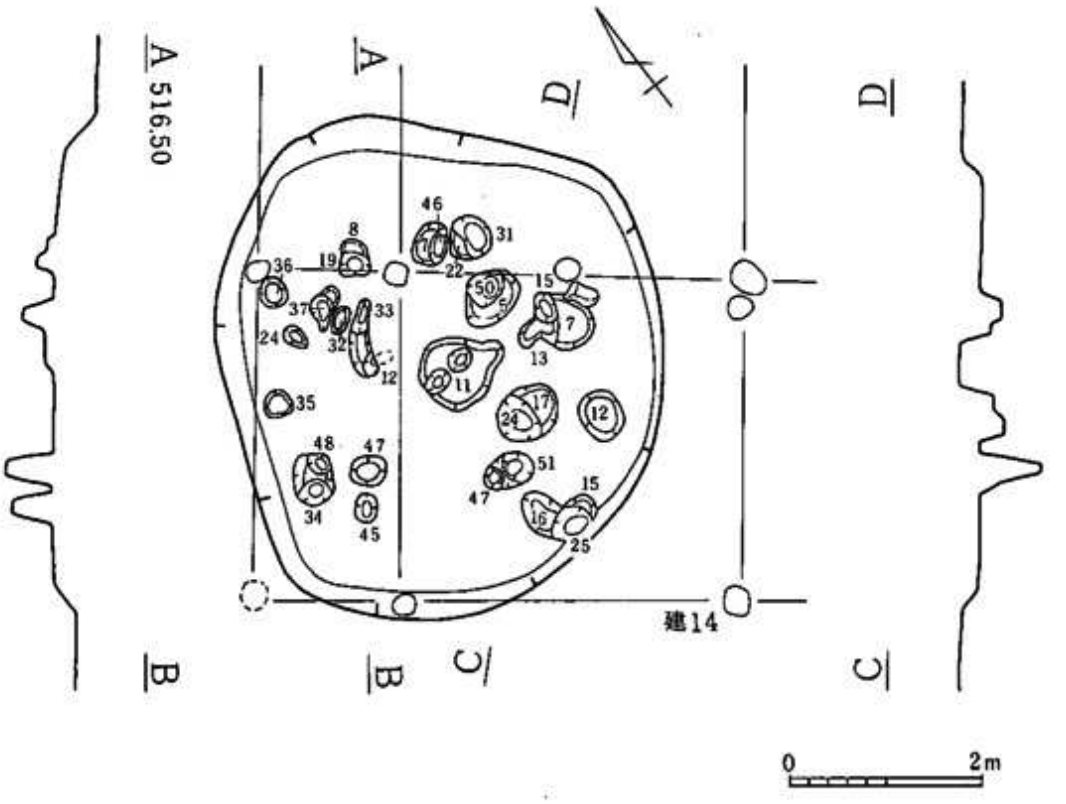
①縄文時代

◇47号住居址

調査区の中央やや北寄りで検出し、完掘した。5×4.6mの不正円形の竪穴住居址である。床は柔らかくはっきりしない。壁の高さは20cm前後で緩やかに立ち上がっている。床の上でいくつかのピットを確認したが、主柱穴を特定することはできなかった。また、炉の存在もわからなかったため、主軸方向は不明である。

遺物としては、木島系いわゆる『オセンベ土器』の深鉢の口縁の一部のほかは小破片のみである。また、焼成粘土塊は用途不明である。石器は摺石以外には完形のものはなかったが、黒曜石のチップが多量出土した。

出土遺物から縄文時代前期前葉と見られる。



挿図4　47号住居址

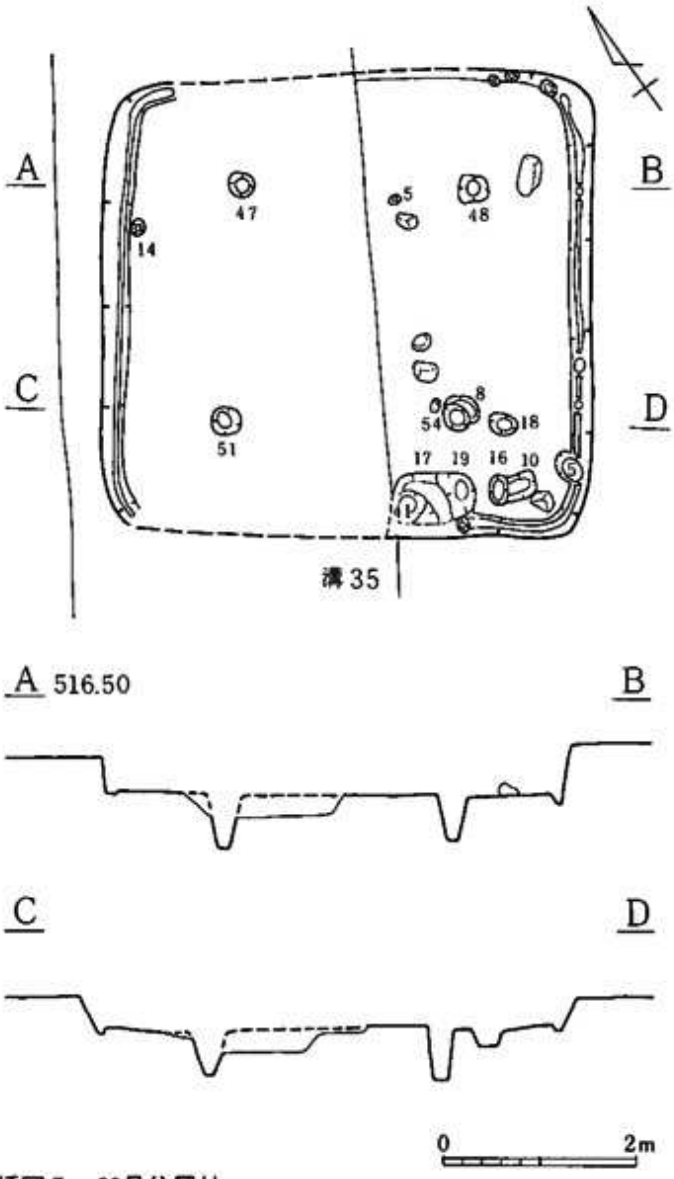
②弥生時代

◇39号住居址

調査区の中央やや北よりで溝35に切られて検出し、完掘した。北西半分が溝により切られているが東と西の壁は確認できたことにより、規模は5×5mの隅丸方形の竪穴住居址である。南側で溝の壁にかかって80×70cmの楕円形の穴があり、状況から入り口施設と判断できたため、主軸方向はN37°Eを示していることになる。壁はほぼ垂直に30cmの高さを持つ、主柱穴は4本確認できた。深さは50cmあったものと見られるが、西側の2本は溝の底に30cm程度が残っていた。周溝はほぼ全部の壁直下にあったものと見られるが、溝に切られたためか東側と西側に確認できたのみである。床は貼床であるがやはり溝のため一部のみで確認した。炉も溝に切られたためか確認できなかった。貼床上にあるピットは居住内空間利用のための柱穴と見られる。

遺物としては溝に切られたためか少量であった。土器としては甕と壺の口縁があり、石器には砂岩の砥石がある。

遺構の時期は後期後半と判断できる。

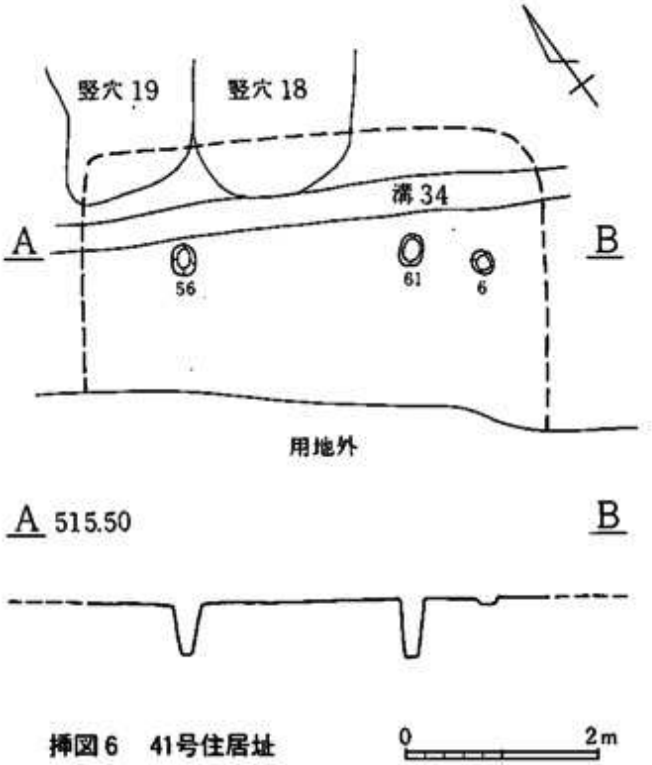


挿図5　39号住居址

◇41号住居址

調査区の中央やや西よりで柱穴を２個検出した。まわりには土取りの穴や溝34があり、さらには水田の造成による削平を受けたものと見られ、その他はなにも確認できなかった。主柱穴は30cmの楕円形で深さが50cm以上あり、かなりしっかり掘られている。

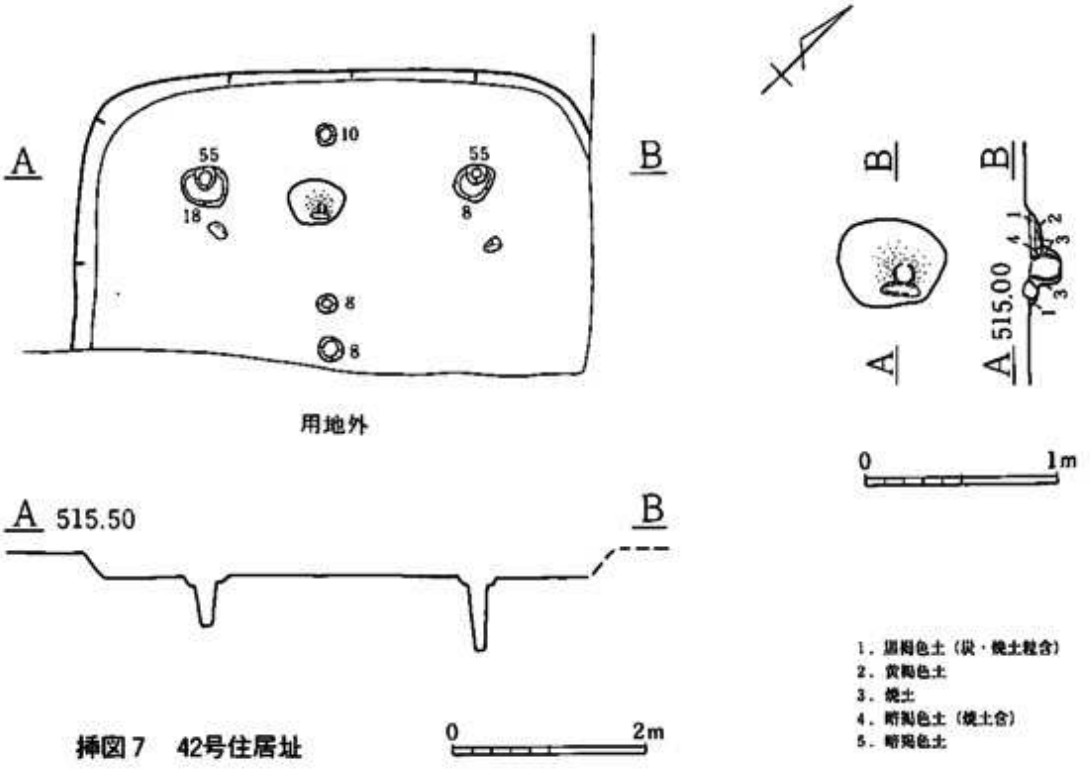
出土遺物は甕が１点出土しているが、時期の特定はできなかった。



挿図６　41号住居址

◇42号住居址

調査区の東端で用地外にかかって検出したため、調査範囲は５×３ｍにとどまったが、５ｍ四方の隅丸方形と見られる。主柱穴は２



挿図７　42号住居址

本しか確認できなかったが、その中間に炉が検出できたことからこの住居址の主軸方向はN48°Wと判明した。壁高は30cmあり急角度に掘り込まれているが、周溝はない。床は良好な貼床で平坦である。主柱穴の最深部（柱痕）は床面から50cm以上も掘られている。主軸方向に炉を挟み3個のピットがある。径はいずれも20cm深さ10cmで。炉は炉縁石を持つ土器埋設である。

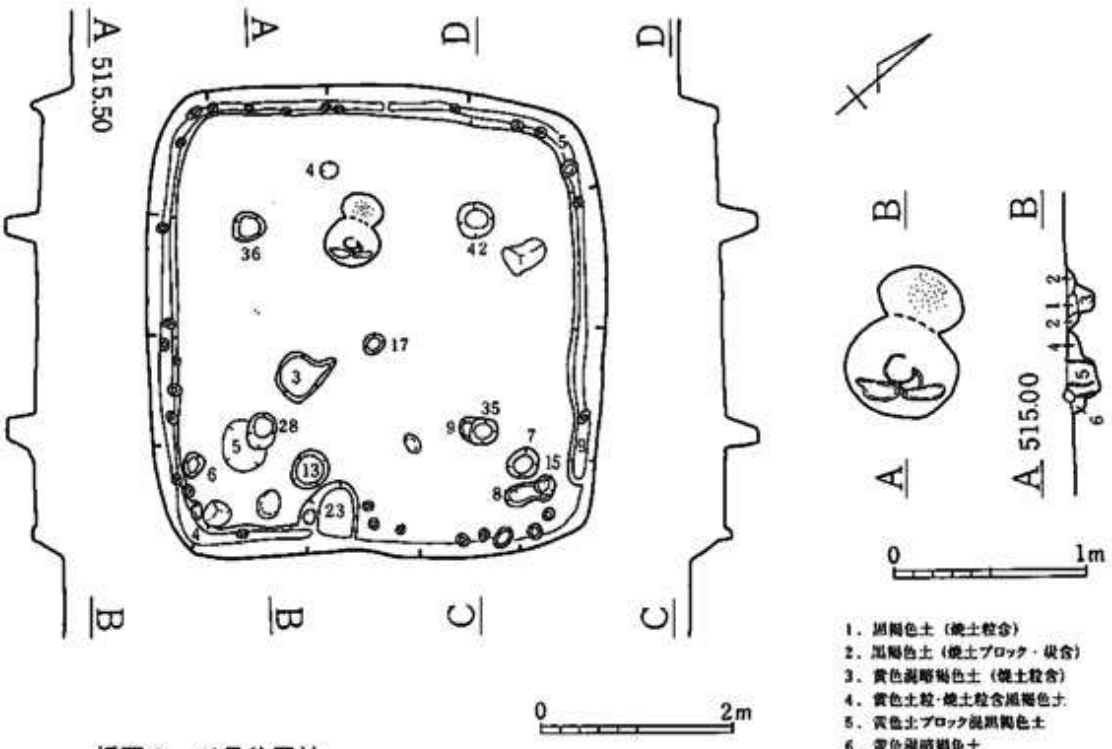
遺物としては炉に使われていた甕と壺が出土している。

時期は遺物から後期後半と判断できる。

◇43号住居址

調査区の南よりで完掘した4.8×4.5mの隅丸方形の竪穴住居址である。主軸方向はN52°Wを示す。壁は急角度に掘り込まれ、40cm前後の高さを持つ。周溝は壁直下に幅20cmのものがほぼ一周している。その中の所々に小さい穴がある。床は良好な貼床である。主柱穴は4本が確認できた。40cmとしっかり掘られてある。炉は2個の炉縁石を伴う土器埋設炉である。東側の壁のほぼ中央に70cm深さ20cmの穴がある。位置的に入り口に関係した施設だろう。床面にはいくつかのピットがあるが、性格・用途は不明である。

遺物は炉に使われていた甕のほか高坏・壺がある。石器としては砂岩の砥石がある。



挿図8　43号住居址

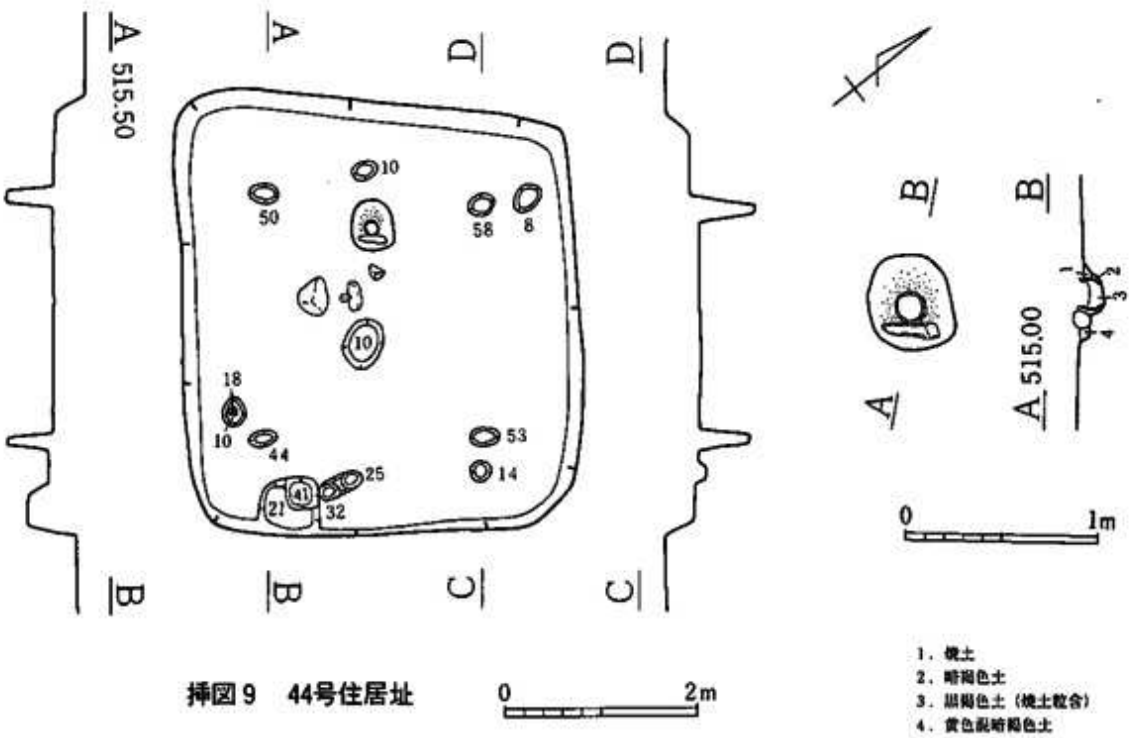
時期は遺物から後期後半と見られる。

◇44号住居址

調査区の南端43号住居址と並んで検出、完掘した。4×4.4mの隅丸方形の竪穴住居址である。主軸方向はN48°Wを示す。壁は急角度に30cm程度掘り込まれていた。床はしっかりした貼床で周溝はない。主柱穴は4個、楕円形で40～50cmの深さを持つ。南の角付近に2段の掘り込みをもつ穴があり、入り口施設とした。炉は炉縁石を伴う土器埋設炉である。その他に床上あるいくつかのピットは居住内空間利用のための柱穴と見られる。

遺物は比較的多く、土器としては甕・壺・高坏がある。石器は硬砂岩製の有肩扁状石器が出土している。

時期は遺物から後期後半である。



挿図9　44号住居址　　0　　2m

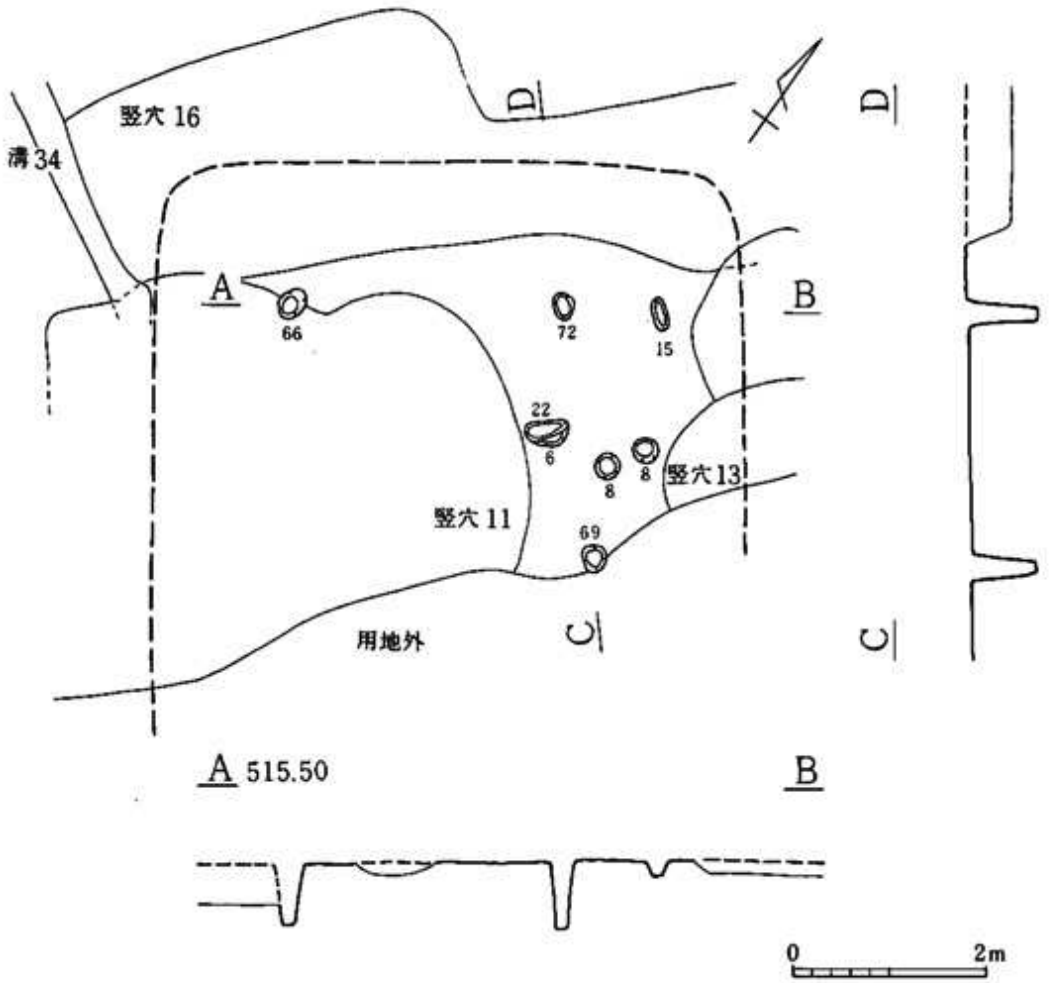
◇45号住居址

調査区の中央やや東よりで、土取りの穴を掘っていて柱穴を検出したため、周囲を精査して住居址と確認したものである。範囲のほとんどは土取りの穴に切られているものの、主柱穴3本と地焼炉が貼床上で確認できた。主軸方向はN55°Eを示しているが規模は不明である。調査した

範囲では壁、周溝や入り口施設は確認できなかった。

遺物はまわりの土取り穴の中からの出土が多く、甕・高坏・壺がある。

時期は遺物から後期後半と判断できる。

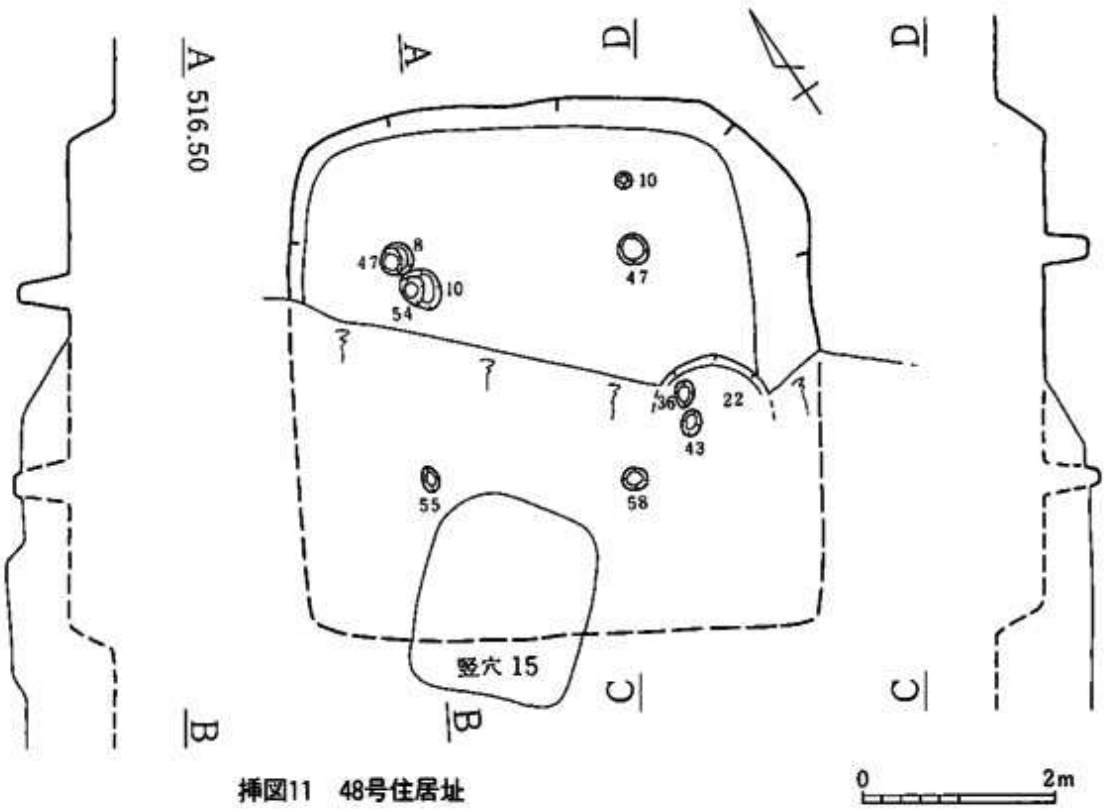


挿図10　45号住居址

◇48号住居址

調査区中央で検出した竪穴住居址であるが、水田の造成により南側半分が完全に削平されている。しかし、南側で主柱穴らしきピットを２個確認できたため、一片5.4mの隅丸方形と見られる。調査できた範囲では良好な貼床があり、深さ45cm前後の主柱穴が２個確認できた。南の壁と造成のため削られた段にかかって20cmのピットがあり、状況から入り口施設と判断した。炉は削平により確認できなかったが、柱穴との関係から主軸方向はN56°Wを示していると判断できた。残っている部分の壁の高さは50cm前後でほぼ垂直に立ち上がっている。

出土遺物は住居址の半分が削りとられているため量は少なく、甕のみである。
時期は遺物から後期後半と見られる。



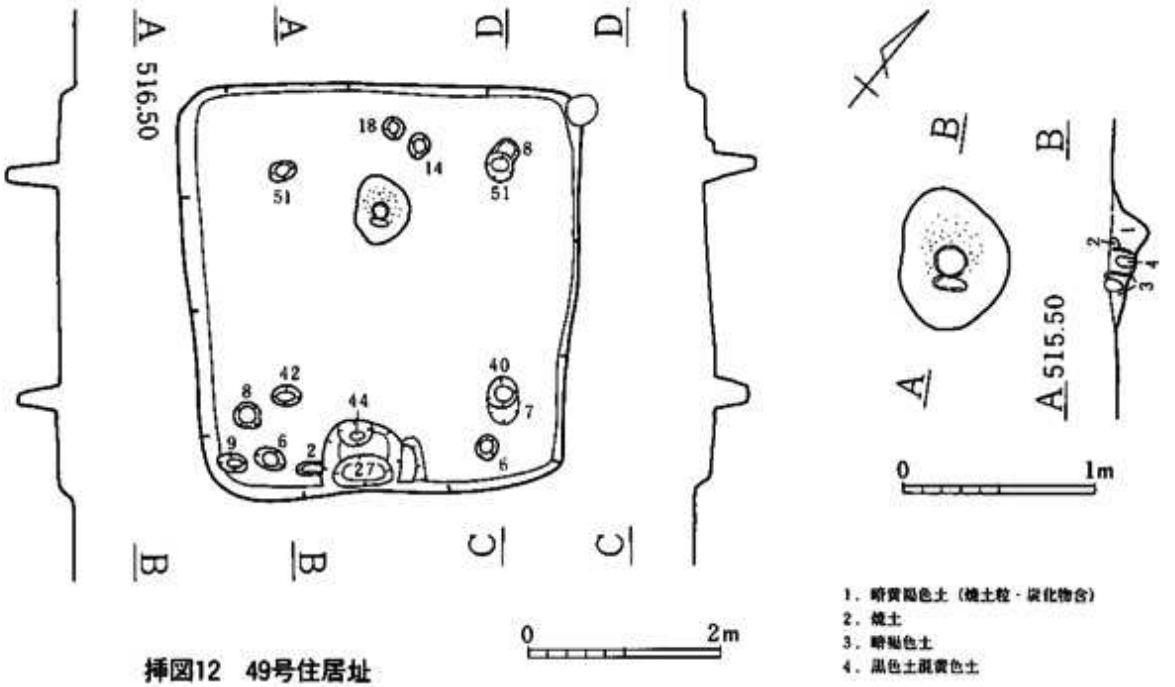
挿図11　48号住居址

◇49号住居址

調査区の北寄りで検出し、完掘した竪穴住居址である。4×4mの隅丸方形である。周溝はないが貼床はしっかりしていた。主軸方向はN44°Wを示す。壁は比較的急角度に掘られているが20cmとほかのものに比べやや浅い。主柱穴は4個確認できた。炉は地床炉である。南東の壁の中央付近に72×72cm半円形で底が2つに別れた穴があり、入り口施設とした。その他に床上で検出したピットは居住内空間利用のための柱穴と見られる。

出土遺物の量は少ないが、甕・壺・高坏の破片と石製の紡錘車がある。

時期は遺物から後期後半と見られる。



挿図12　49号住居址

(2)掘立柱建物址

①時期不明

◇掘立柱建物址13

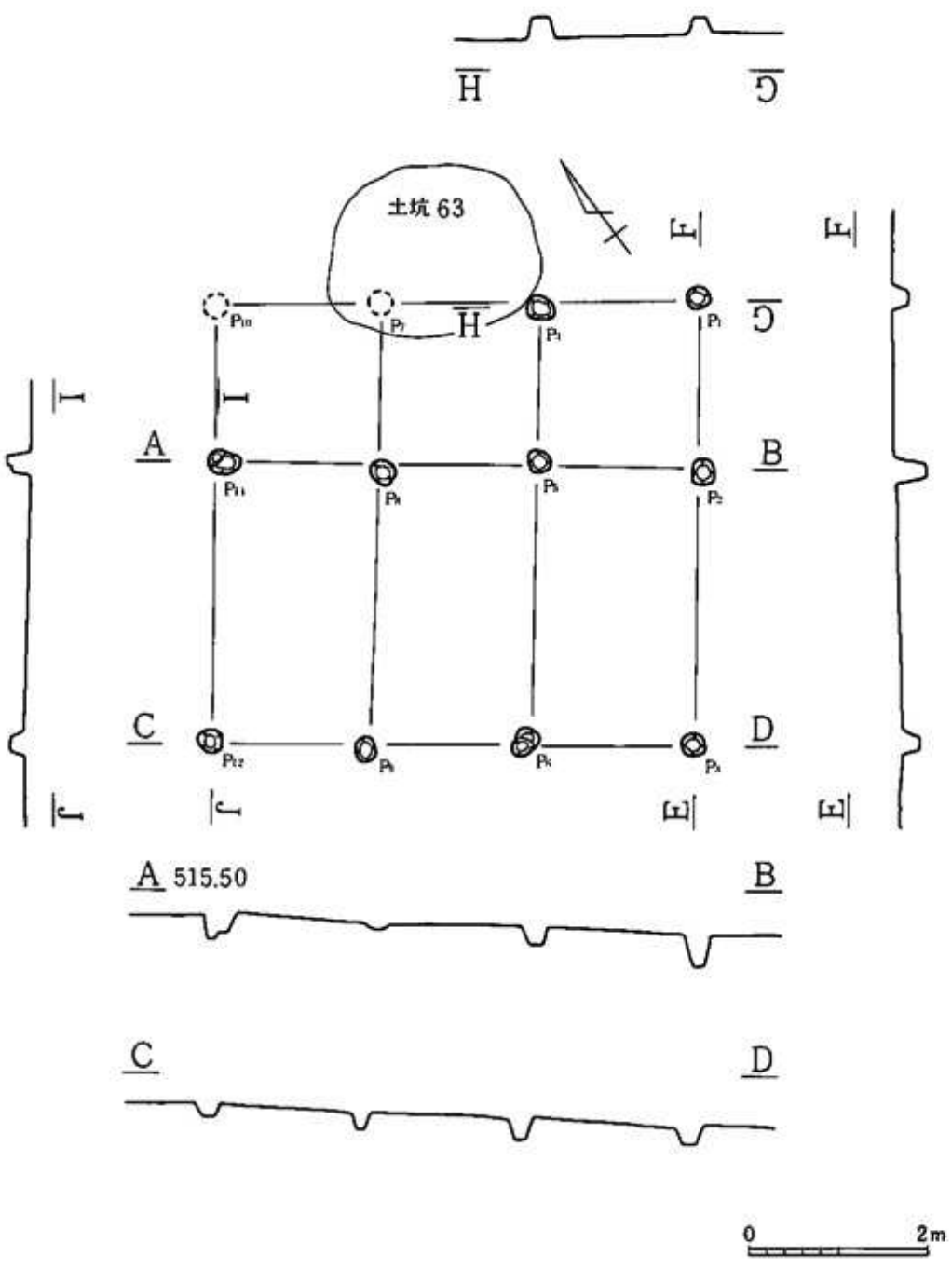
調査区南側で43号住居址の南側・44号住居址の東側で検出した。土坑62の覆土を切る。3×3間の総柱建物址である。規模は6.4×5.2mほどある。柱穴は12本のみを確認した。いずれも径20cm程度深さ15cm前後のピットである。長軸の方向はN36°Eを示すがこれが桁行か梁行かはわからなかった。

遺物は弥生時代の台付甕が柱穴から出土しているが、混入の可能性があり、時期はわからない。倉庫的な建物の可能性が高い。

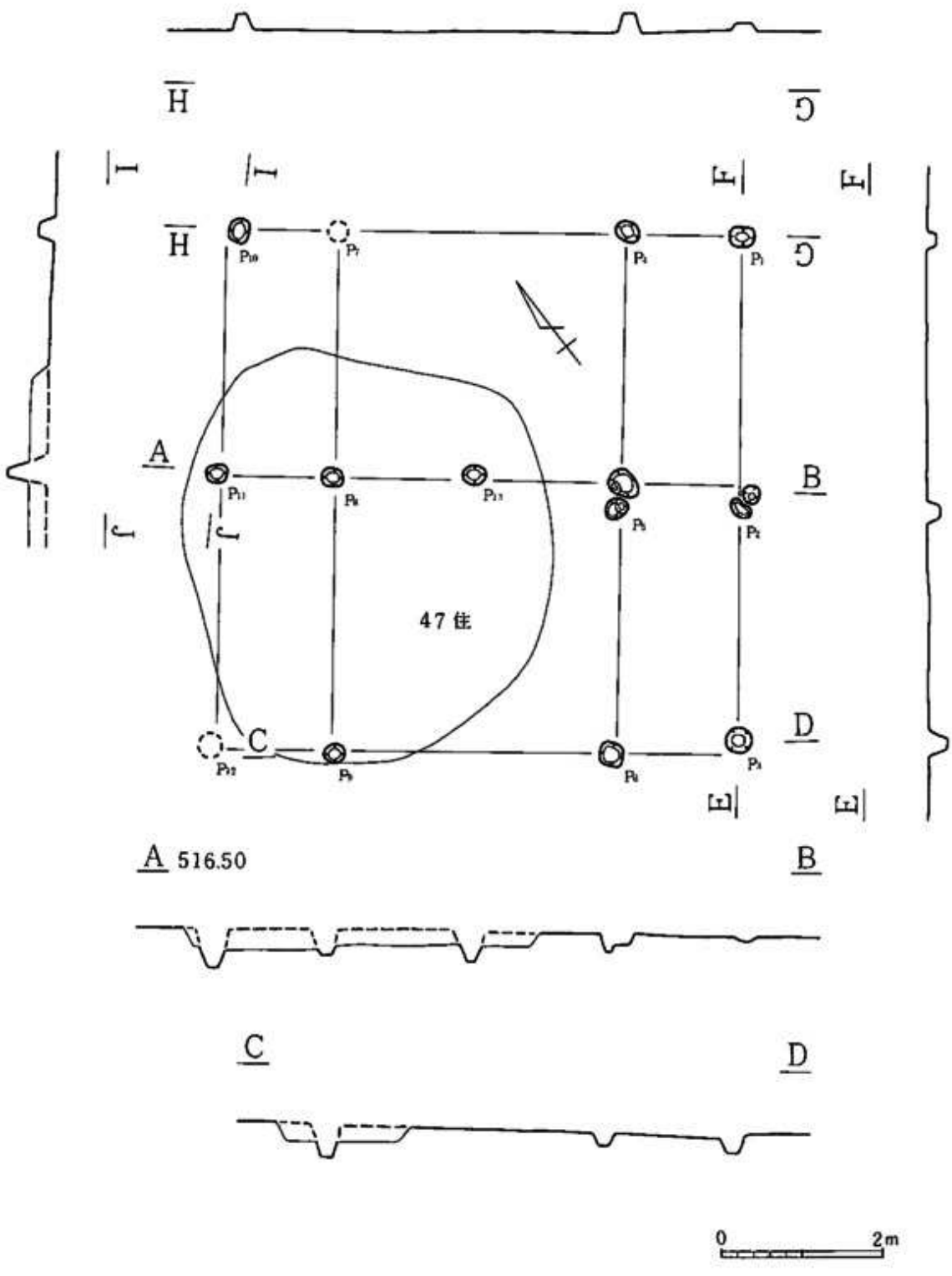
◇掘立柱建物址14

調査区中央やや北よりで検出した。2×4間の総柱の建物址と見られるが、柱穴が一部では確認できない箇所がある。規模は6.4×6mと見られるが、多少歪みが見られる。長軸の方向はN52°Wを示している。柱穴の大きさ、深さはまちまちである。柱穴がとなりあうものが数個認められることから建て替えられた可能性がある。

柱穴からの遺物の出土はなく、時期の特定はできなかったが、倉庫的な建物と考えられる。



挿図13　建物址13



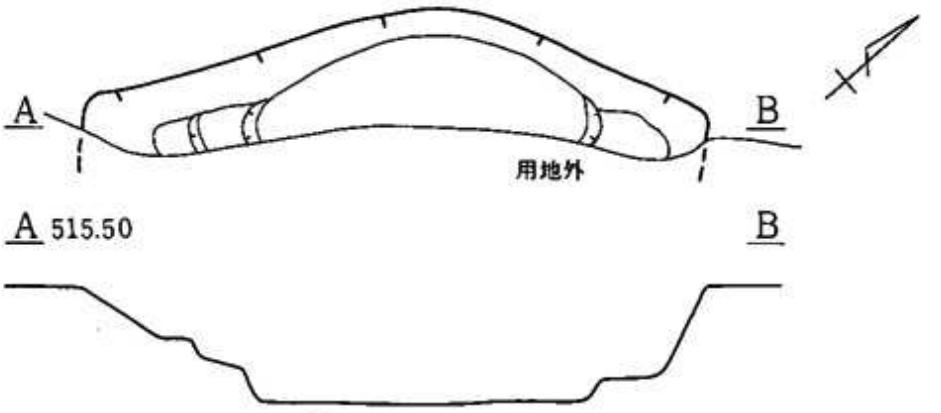
挿図14　建物址14

(3)竪穴

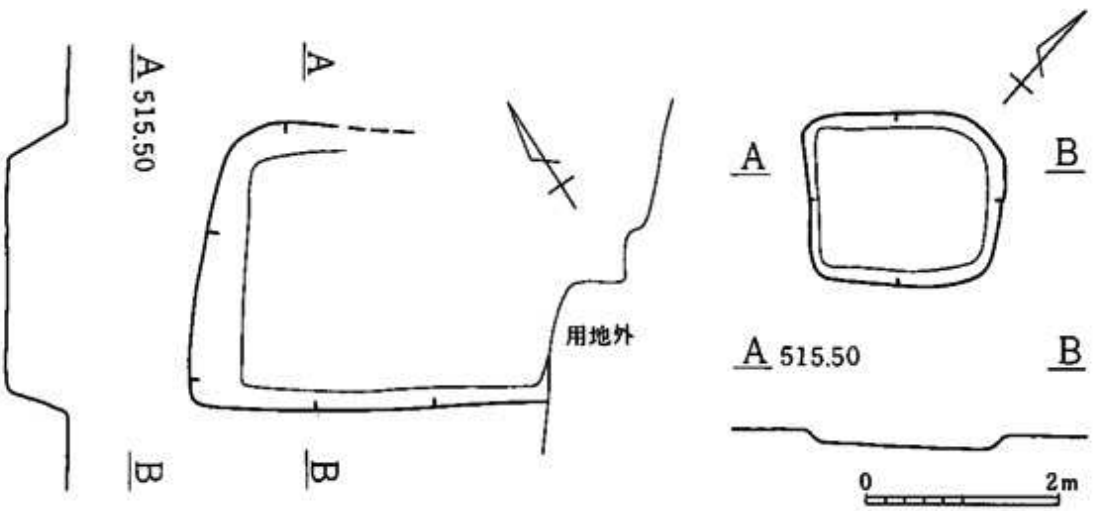
①中世

◇竪穴10

調査区南東の端で用地外にかかって検出した。調査できた範囲は6.4×2.4mのみであるため全容はつかめない。深さは120cm程度で壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁の一部に段がみられる。出土遺物は見込みに印刻が施され、繊部釉のかかった皿が出ている。正確な時期は判断できないが、形態等から中世と判断したが、性格は不明である。



竪穴10



竪穴14　　竪穴15

挿図15　竪穴10・14・15

◇竪穴14

調査区中央南で検出した。北側は土取りの穴により切られている。また一部未調査区にかかったため規模はわからない。調査できた範囲は５×３ｍであるが、深さは検出面より70cmと比較的深い。平坦な底部は三和土状に締まっており、壁は垂直に掘り込まれている。貯蔵庫的な施設と考えられるが、床上にも、周囲にも柱穴は確認できなかった。

②時期不明

◇竪穴15

調査区ほぼ中央で検出した2.3×２ｍのほぼ方形のものである。位置的には48号住居址と重複する位置であるが、住居址が水田の造成により削平されたため、切り合い関係を把握できなかった。底部はやや北に傾斜するもののほぼ平坦である。壁の高さは10cmしかないが、比較的急角度の立ち上がりをしているところから、掘られた当時はなかり深いものだったことが推測できる。

(4)土坑

①縄文時代

◇土坑63

43号住居址の南東で検出した。平面形で2.3×２ｍの楕円形である、掘り下げたところ20～30cmで底に達した。さらに中央部に深く掘られていた。その範囲は1.6×1.2mで深さ検出面から130cmほぼ垂直であった。底部は中央にやや窪んでいるもののほぼ平坦である。形態から判断するに落し穴と見られる。

遺物の出土はないため時期の特定はできないが、状況から当該時期と考えられる。

◇土坑65

39号住居址の南西、溝35にかかって検出した。2.7×1.5mの楕円形である。深さは65cmあり、底は２段になっている。急角度に立ち上がる壁には中段がある。

出土遺物には、俗に『オセンベ土器』と呼ばれる木島系の深鉢の破片と五領ヶ台の深鉢の破片および諸磯期併行と見られる土器片がある。さらに、黒曜石製のスクレイパーが出土した。縄文時代中期初頭と考えられるが、性格は不明である。覆土の状況からロームマウンドの可能性もある。

◇土坑67

47号住居址の西側で検出、完掘した、2.6×２ｍの不正円形である。深さは20cm前後と浅く、

立上がりは緩い。底にはいくつかの穴がある。用途・性格は不明であるが、『オセンベ土器』の小破片が出土している。

◇土坑68

土坑67の南西側で検出、完掘した3.4×1.8mの不正楕円形である。底はほぼ平らであるが、3つのピットを持つ。壁は比較的緩やかに立ち上がっている。

遺物の出土はなく、時期・性格とも不明。

◇土坑69

調査区の西端で用地境にかかって検出した直径1mの円形のものである。深さは40cmあり、底は平坦で壁は垂直に立ち上がっている。出土遺物としては、黒曜石製の石鏃が1点あるのみで、時期・性格の特定はできなかった。

◇土坑70

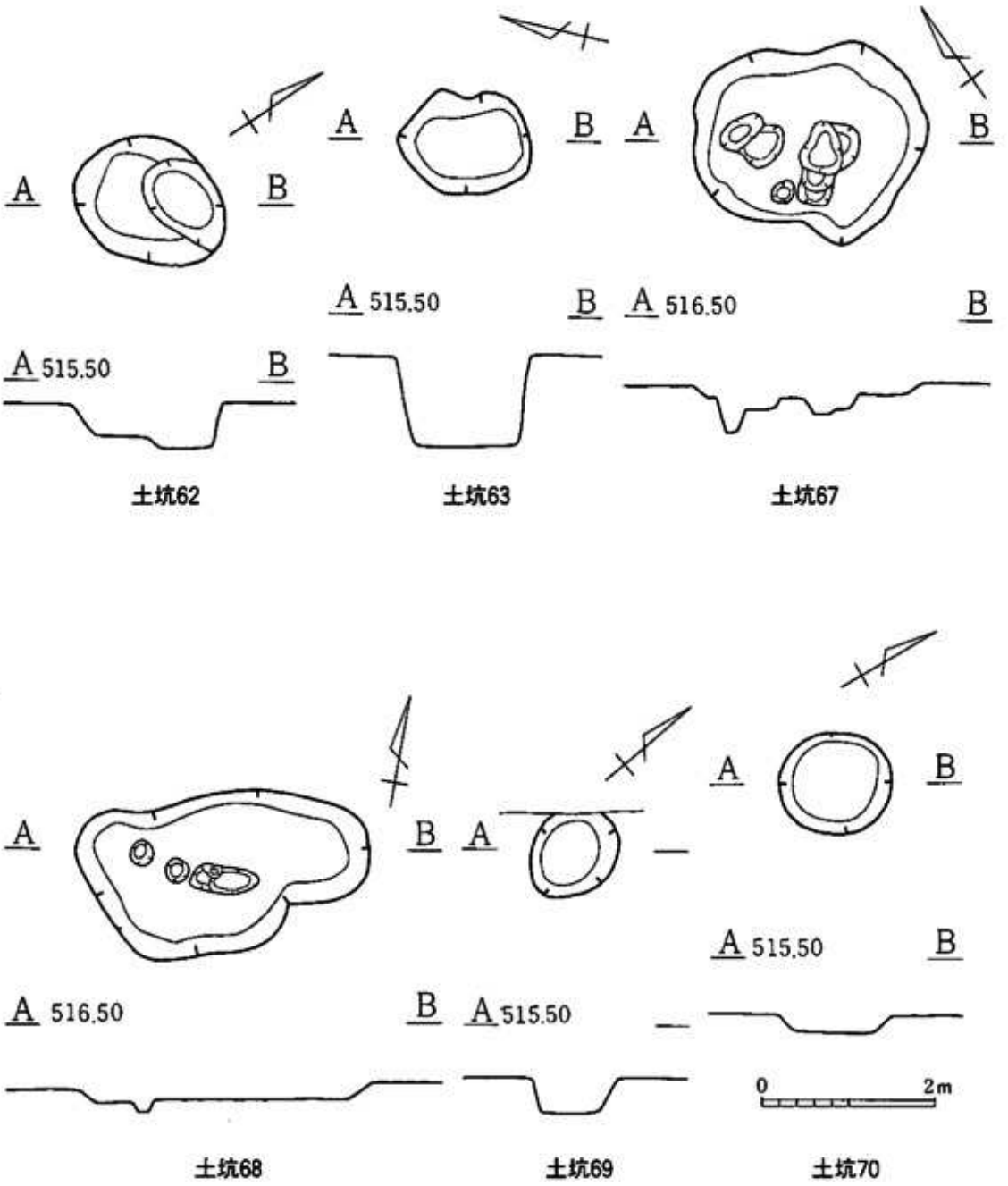
調査区の西よりで検出した径1.3mの円形の土坑で、深さは20cm前後底は平坦になっている。壁は比較的急角度に立ち上がっている。検出面は水田の造成でかなり削平されていることから、掘られた時点ではもっと深いものであったろう。

出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

②時期不明

◇土坑62

43号住居址の東側で攪乱に切られて検出した。土坑自体の大きさは1.8×1.4mの楕円形である。底はほぼ東西に2段になっている。深い東側で50cm、西側で35cmを計る。次代性格とも不明である。出土遺物は深鉢の底部のみがある。



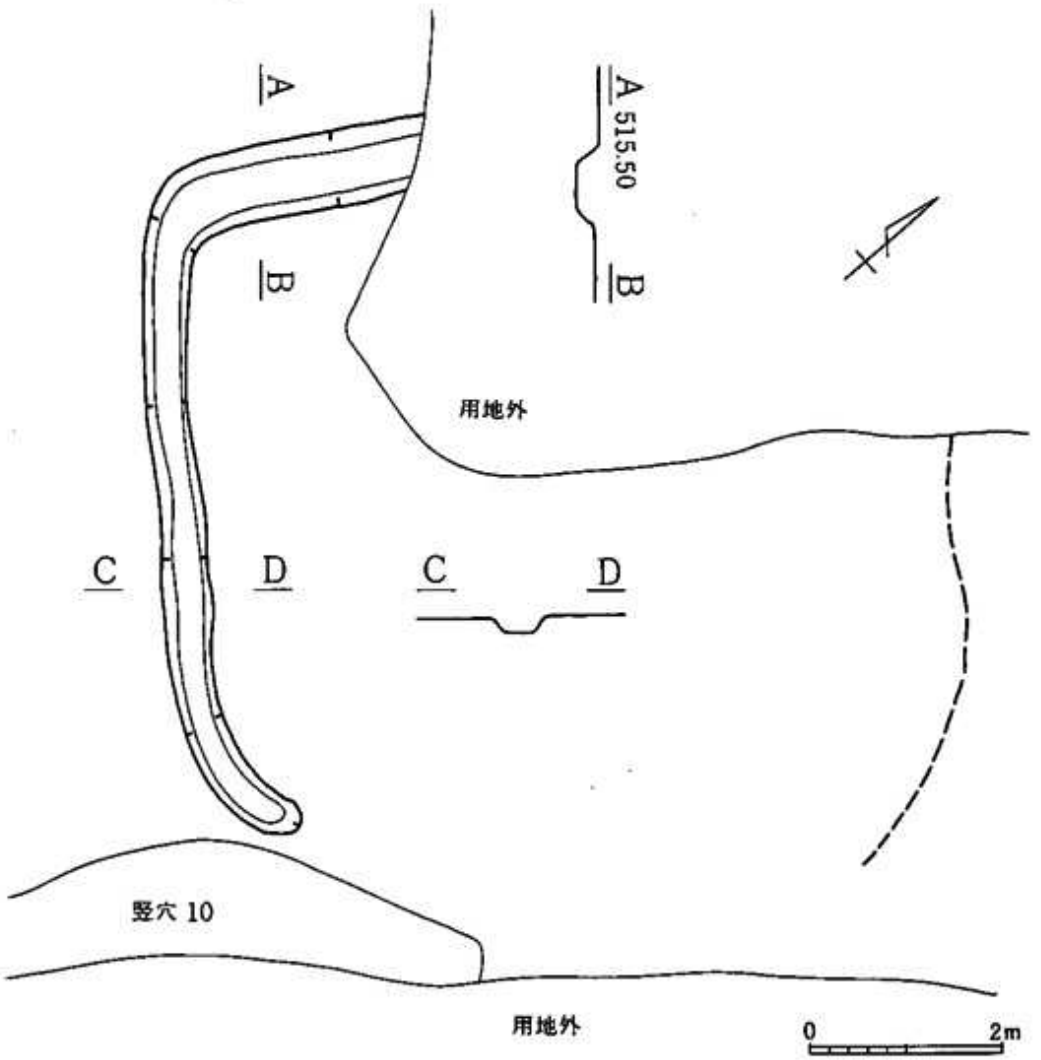
挿図16　土坑62・63・67・68・69・70

(5)墓

①弥生時代

◇方形周溝墓10

調査区東よりで、用地外にかかって北西に延び溝を検出した。この溝は途中でほぼ90°曲がるため形態から7.2×７mの周溝墓としたが、北東側の溝は確認できなかった。溝の幅は80cm深さ20cm前後で緩やかな立ち上がりである。入り口は南側の溝が切れた部分と考えられる。主体部は用地外にあるのか今回の調査では確認できなかった。

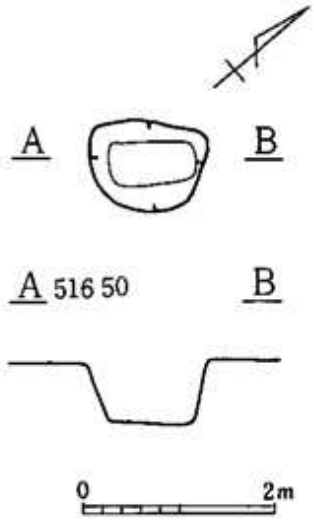


挿図17　方形周溝墓10

②中世

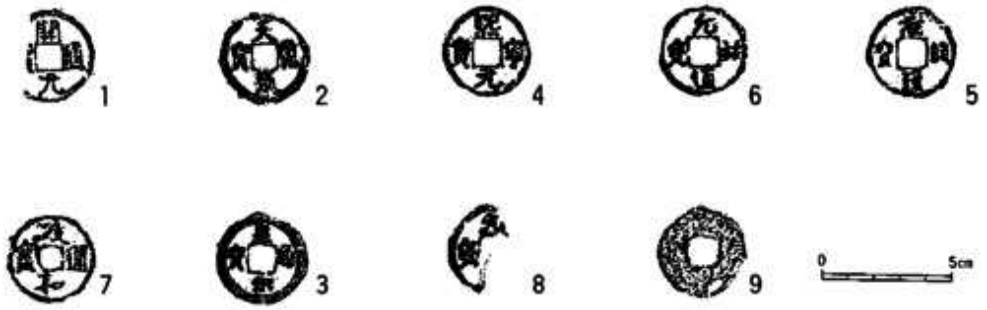
◇土壙墓1

溝36と溝37の中間で検出した、1.2×1mの楕円形である。平坦な底部は92×44cmの長方形にほられており、壁はほぼ垂直に立上がっている。長軸の方向はN40°Eを示している。覆土から古銭が8枚出土したことから墓と判断した。(別表)



挿図18　土壙墓1

No	銭　名	初鋳年	中国王朝	読み方	備　考
1	開元通寶	621	唐	対	楷書体
2	天禧通寶	1017	北宋	廻	楷書体
3	皇宋通寶	1039	北宋	対	楷書体
4	熙寧元寶	1068	北宋	廻	楷書体
5	元祐通寶	1093	北宋	廻	篆書体
6	元祐通寶	〃	北宋	廻	行書体
7	政和通寶	1111	北宋	対	楷書体
8	元〇〇寶			廻	行書体　1／2欠損
9	不　明				腐食がひどい



(6)溝址

①時期不明

◇溝址33

調査区の南側で43号・44号住居址の北西で検出した。調査範囲は幅２ｍ長さ27ｍである。溝は、ほぼ運動公園通りに平行した方向で延びている。この方向は43号・44号住居址の主軸方向にほぼ直行するものである。南西はやや西へまがる。検出面が北から南へ傾斜しているためか、溝の深さは北で120cm、南では80cmと差がある。上部の幅が200cmあるのに比べ、底部は30cmしかなく、断面形では逆フラスコ状になっている。

出土遺物としては、弥生時代の壺・甕の土器の他、打製石斧がある。

時期は弥生時代後期以降ではあるが、詳細な時期の特定はできなかった。水の流れた痕跡はなく形態から判断する限り区画を意図した溝である。

◇溝址34

調査区の南より用地境と平行して検出した掘り込みである。一部未調査箇所や土取りの穴に切られるもののほぼ北西から南東にむかって直線状に37ｍを調査したが、南東端は攪乱に切られているもののさらに延びるものと見られる。北西は削平により浅くはなるがさらに用地外へ続くものと見られる。この溝が最大になるのは溝33と切り合う箇所で、幅1.2ｍ深さ60cm、一番小さくなるのは溝35と切り合う箇所で幅0.4ｍ深さ15cmである。底部は平坦で壁は急角度に掘り込まれており、断面形は場所により大きさは異なるもののいずれも逆台形になる。

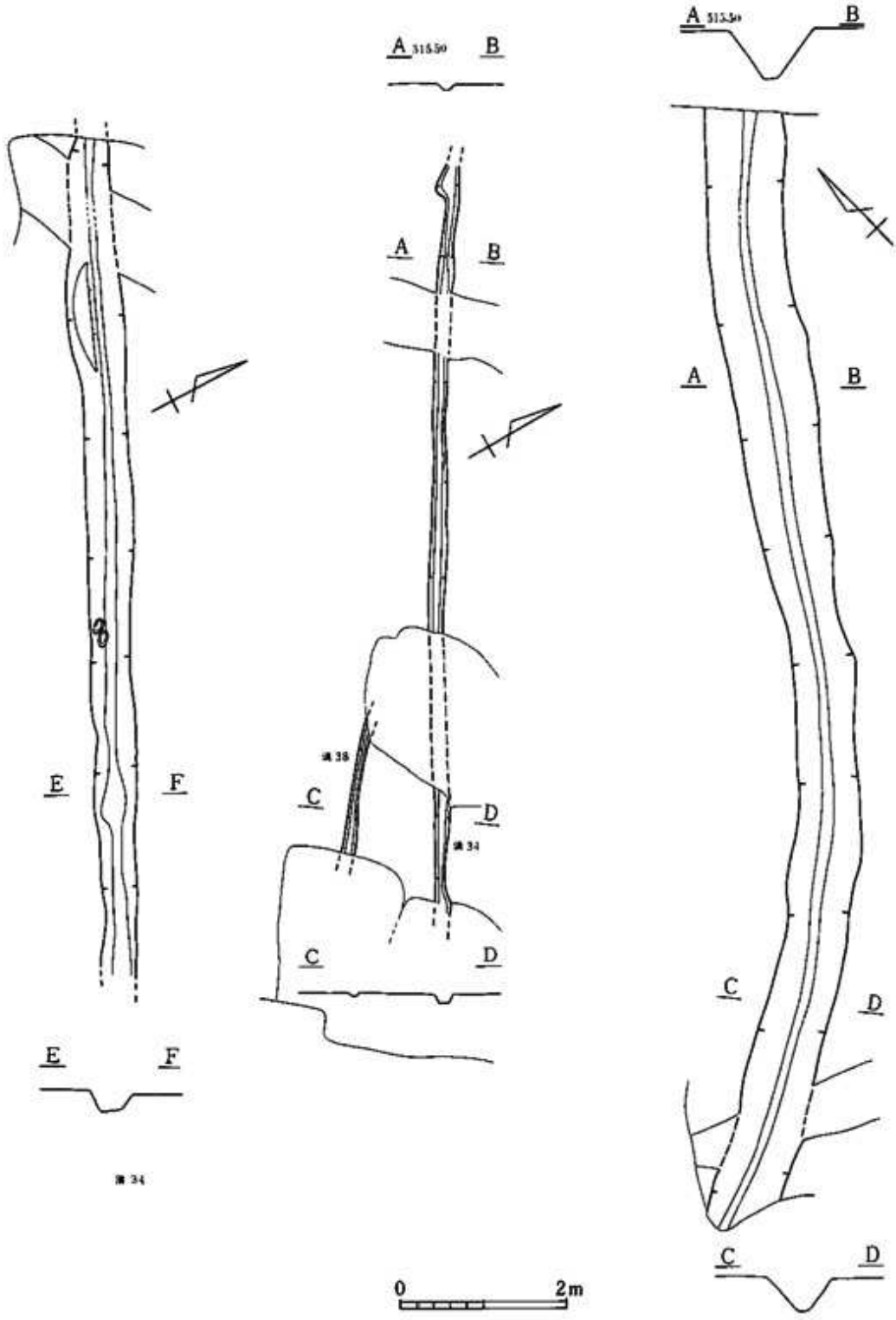
遺物は混入したとみられる石鏃が１点出土したのみで、時期はわからない。水の流れた痕跡はなくなんらかの区画のために掘られた溝と考えられる。

◇溝址35

調査区中央やや西よりで検出した。水田の造成により用地が上下２段になっているため、上段では深さ80cm前後あるのに対し、下段では底の窪みのみが確認できる程度である。さらには土取りの穴に切られており、形態を知るのはむづかしい。しかし、南東の端でかろうじて両側の壁が確認できる程度である。

上段では39号住居址を切っており、中央の段付近で溝36に壁を切られている。幅２ｍで北東から南西へ延びるものと見られる。壁は両側に段があり犬走り状になっており、上段の壁が垂直に掘りこまれているのに対し、下段は上段に比べやや緩やかである。断面形は凸字を逆さにした格好である。底部はほぼ平坦で南西に向かうにしたがって徐々に深くなっていく。

下段も南西の端では50cm程度の深さを持ち幅も1.6ｍを計るしっかりした溝であるが、下段中央部まではほとんどその姿は水田の造成による削平のためわからない。



溝址34　　溝址33

挿図19　溝址33・34

出土遺物には摺鉢の破片、茶碗の破片、打製石斧がある。弥生の住居址を切っていることと遺物の時期から近世に属する可能性があるが特定することはできない。水の流れた痕跡はなく、なんらかの施設あるいは地域を区画するための溝と考えられる。

◇溝址36

調査区の中央やや北より、溝35の西側で検出した。水田造成のため、一部のみの調査となった。長さは5.6m、幅３ｍで２本にわかれている。覆土が砂であること底に細かい窪みがあることから自然水流による溝と判断した。

遺物は出土していないため、時期の特定はできなかった。

◇溝址37

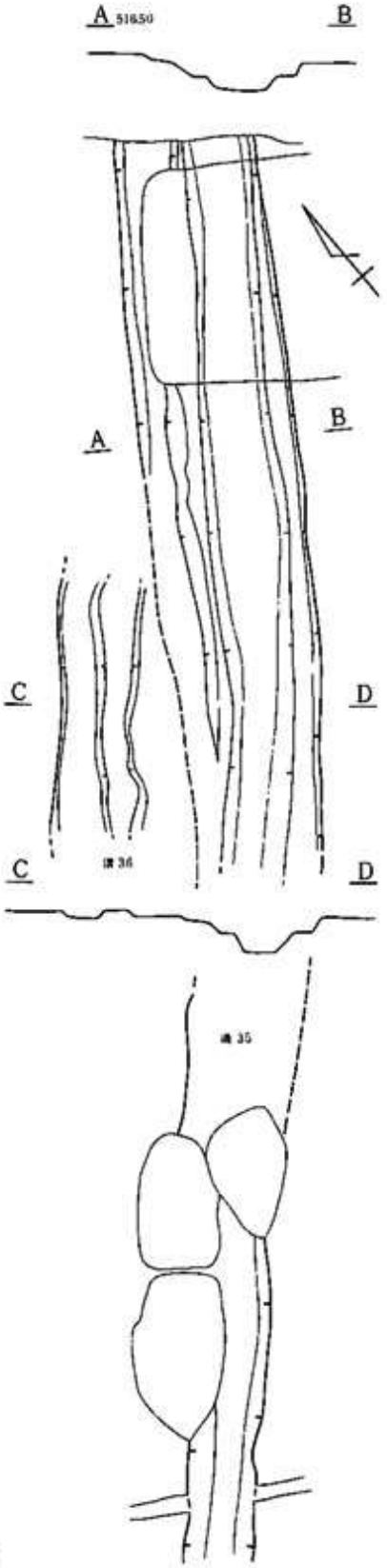
調査区の北側、49号住居址の西側で砂の入った溝を検出した。北東から南西に水が流れていたものとは見られる。しかし、水田の造成のため調査できた長さは15mにとどまった。最大幅で80cm、北東の端は底部の窪みしか確認できなかった。また、途中にロームマウンドがあり、掘ってしまったため、一部切れている。

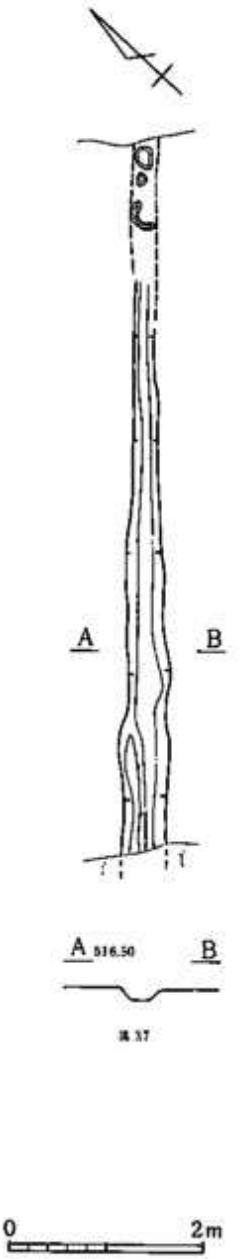
遺物は縄文時代前期の土器および打製石斧、石鏃・ガラス玉があるが、混入品と見られる。

◇溝址38

竪穴14の西で土取り穴との間で検出した長さ３ｍ幅30cm深さ５cmの溝である。底から壁にかけては、ほとんど境がなく緩やかに立ち上がっている。

遺物の出土はなく時期は不明である。





溝址36　　溝址35　　溝址37

挿図20　溝址35・36・37

(7)周辺ピットおよびその他の遺構

◇周辺ピット

調査区内では下の段はほとんどピットがない。これは造成による削平のためであろう。

建14の周辺では建物と同様なピットがいくつか確認された。一部調査できない部分もあり断言できないが、建物址が存在した可能性は捨て切れない。

49号住から溝37の北西にかけても多数のピットがある。平面形が同規模・同形のもので、直線的に並ぶとも見られるものもある。用地外を調査しないと断言できないが建物址の可能性も残す。

◇その他の遺構

上記以外の遺構は、調査区の中央南から溝35にかけて確認した、竪穴状の掘り込みがある。壁際に階段を持つものがあることや、ロームのみを掘り、地山の礫が現れるところで止めていることなどから、赤土を取るために掘られた穴と考える。覆土からは打製石斧や有肩扁状形石器等が出土しているが、混入品と見られる。

(8)遺構外出土遺構

調査範囲内では、遺構に伴わない遺物が多少出土している。

◇縄文時代の遺物

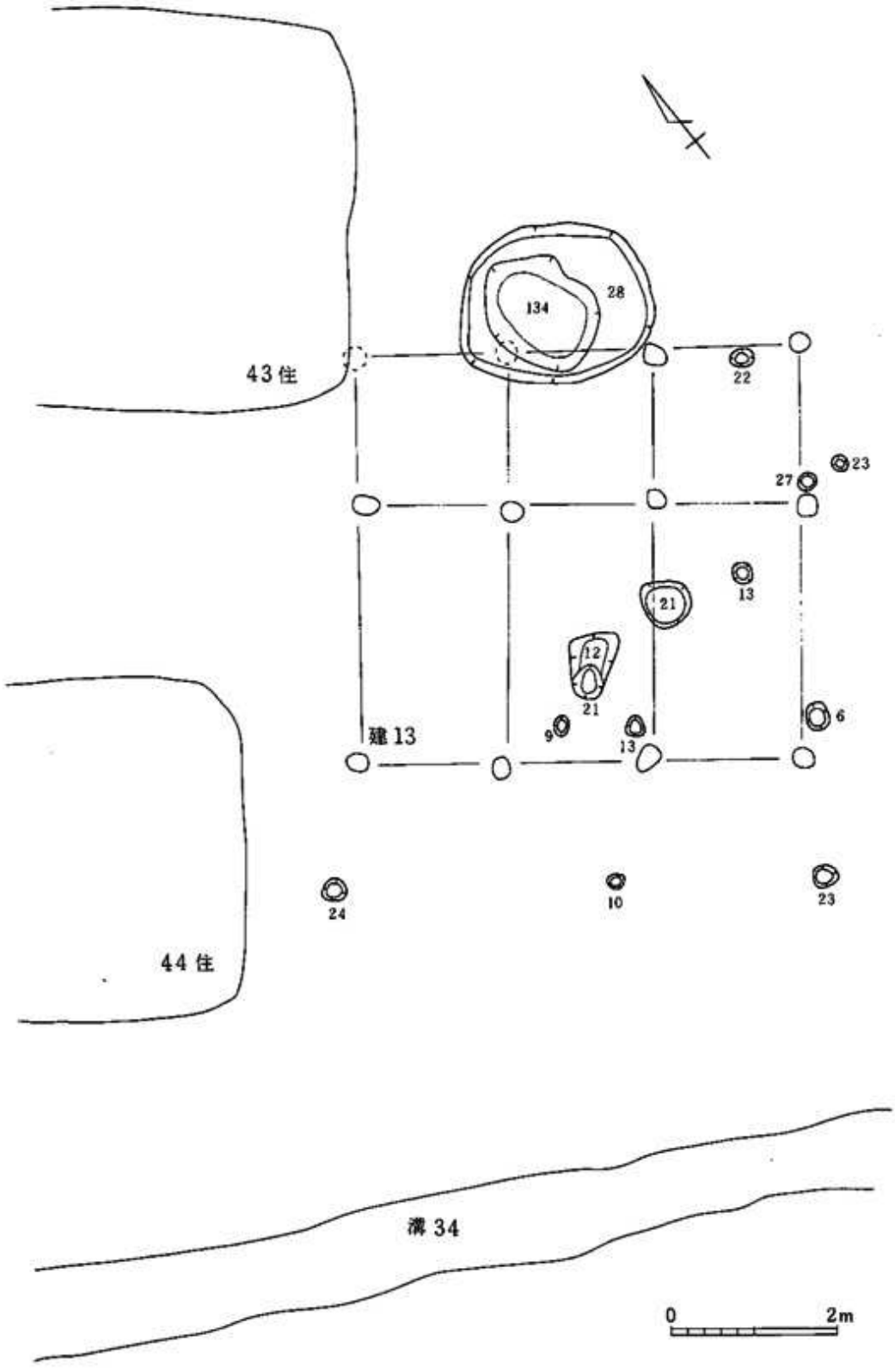
遺構に付随しない遺物はほとんど出土していない。

◇弥生時代の遺物

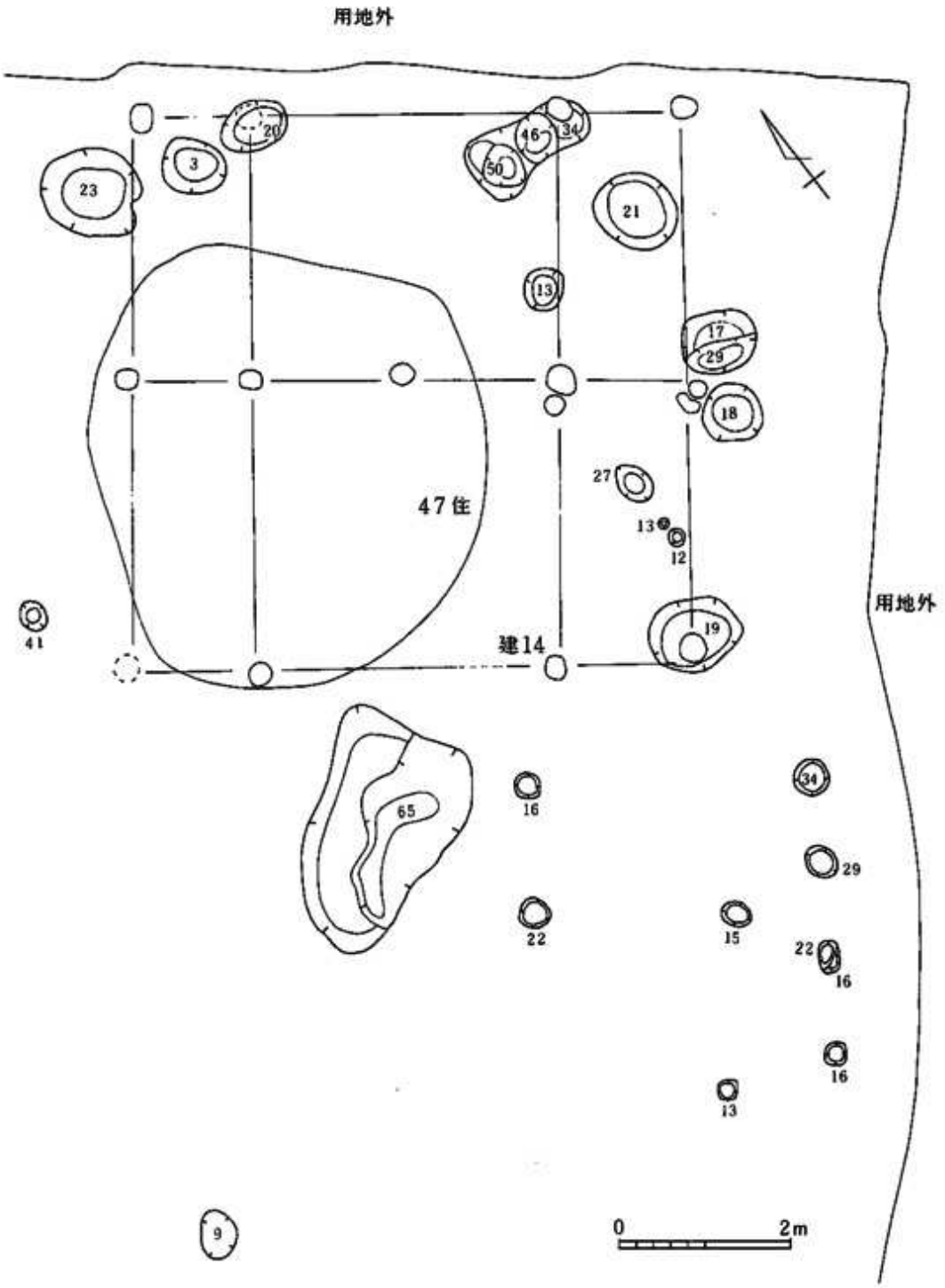
土器片が少量認められるが、いずれも小破片である。器形はいずれも甕や壺である。当該時代の遺構に附随すべきものと思われるが、後世の攪乱等により移動したものと見られる。

◇中世・近世・近代の遺物

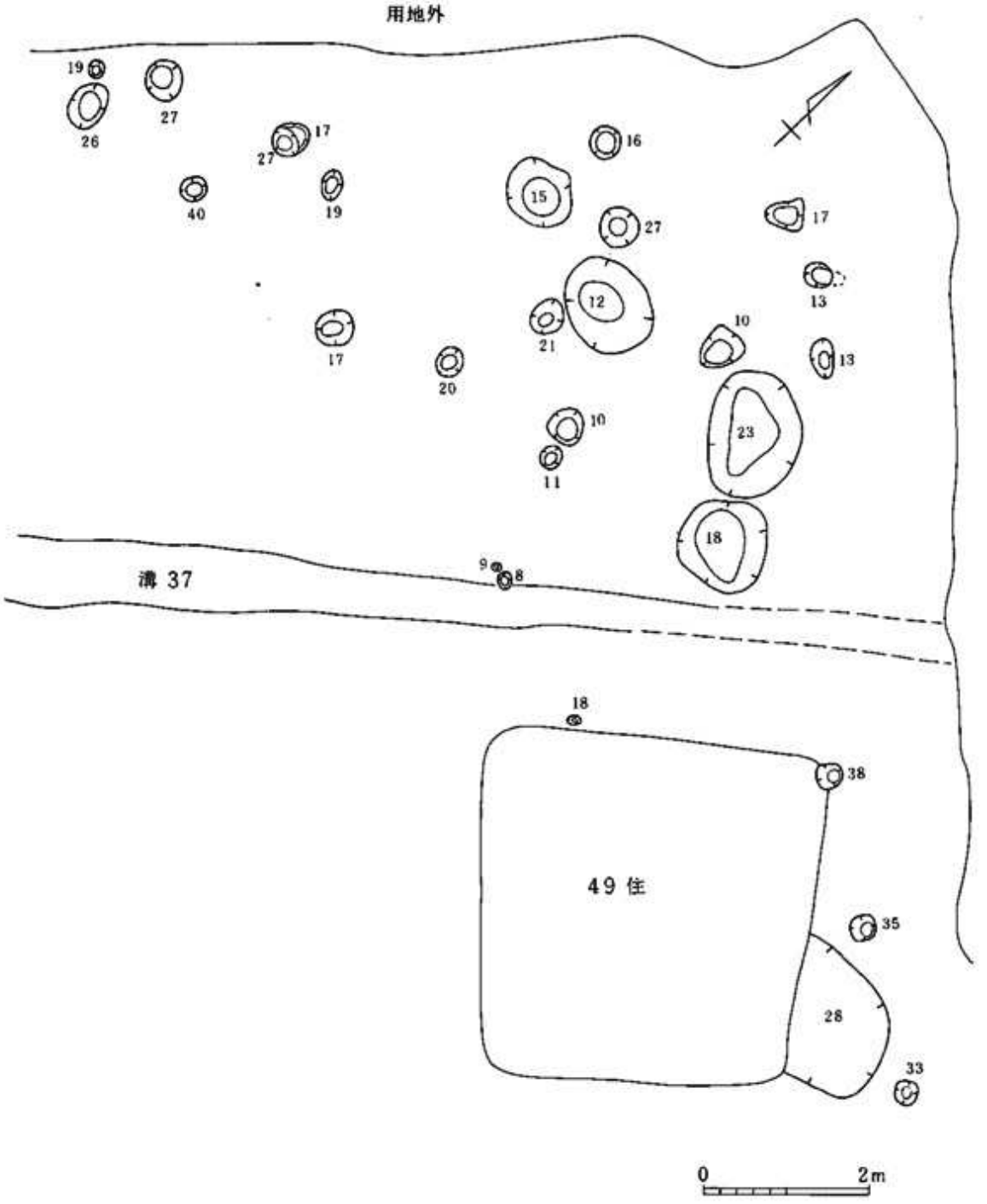
陶器・磁器の小破片が出土しているが、擂鉢を除いては器形がわかるものはない。



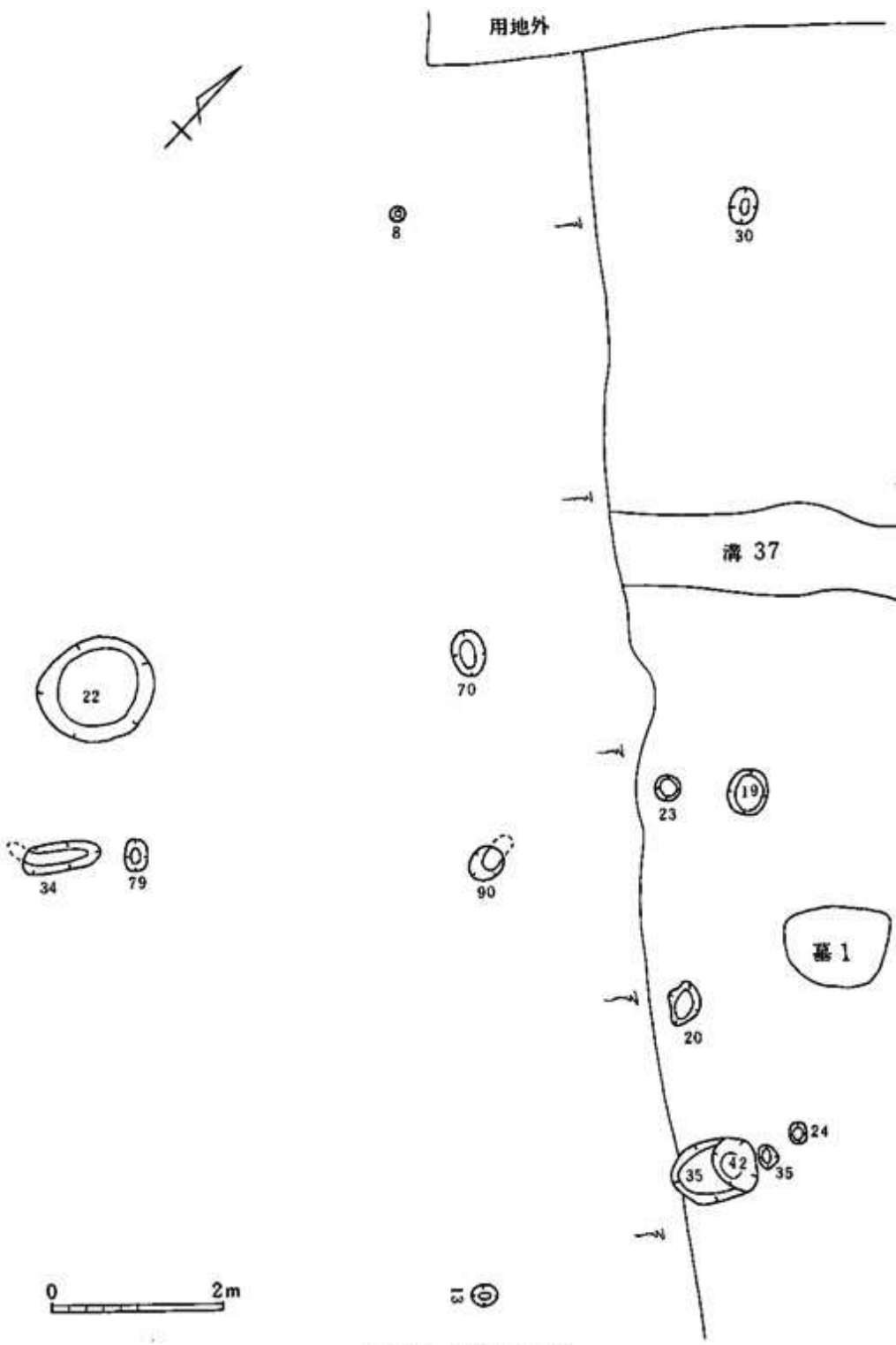
挿図21　周辺P：十(1)


用地外
20
3
23
46
34
50
21
13
17
29
18
27
47住
13
12
41
建14
19
用地外
65
16
34
29
22
15
22
16
16
13
9
0
2m

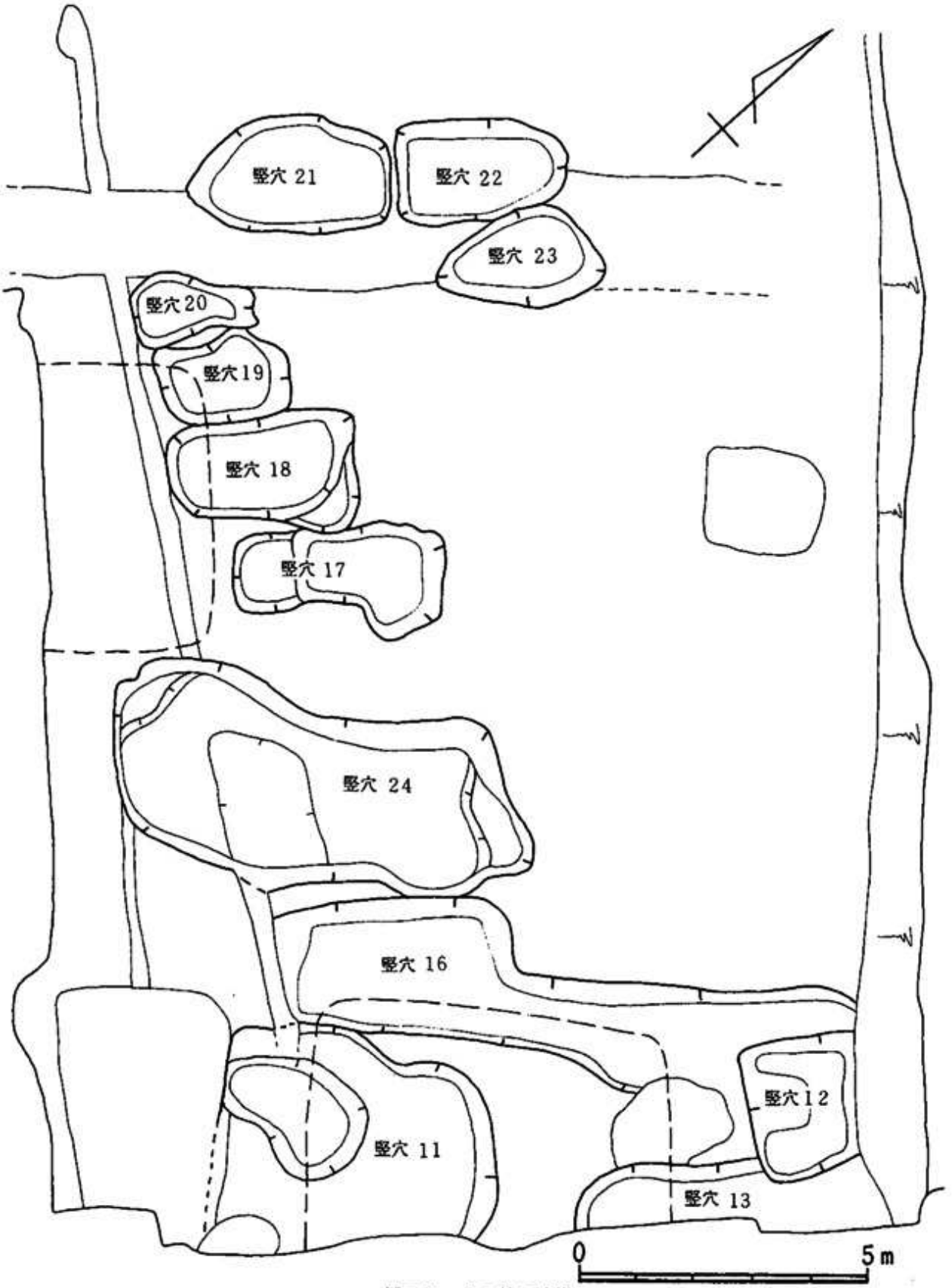
挿図22　周辺P：十(2)



挿図22　周辺P：十(3)



挿図23　周辺P：十(4)


竪穴 21
竪穴 22
竪穴 23
竪穴20
竪穴19
竪穴 18
竪穴 17
竪穴 24
竪穴 16
竪穴 11
竪穴12
竪穴 13
0
5m

挿図24　その他の遺構

Ⅳ まとめ

今回の調査地点周辺では、これまでに数回にわたり緊急発掘調査が実施されており、数々の調査成果が積み上げられてきている。その結果としてこの田井座遺跡の消長や性格もある程度具体的に描出できる段階に至っているといえるが、今回の調査も限られた範囲内での調査であり、遺跡の全体像を把握するには多少尚早な観もある。今回はいままでの調査箇所より西に寄った部分であり、集落の範囲の確定に関わるなんらかの事実確認の可能性もあった。

この遺跡は自然災害の影響を受けにくく、水利条件にも恵まれた尾根状微高地に展開する集落であり、縄文時代前期前葉・弥生時代後期、さらには中世と隔絶したそれぞれの時代のみに展開されている。なぜ連続して集落が存在できなかったのか。ひとつの要因に人口増加に見合う生産力を持ち得なかったものと考えられる。尾根の北西に細長く拡がる低湿地のみの生産力では不十分であり、増大した人口を支えられず、もっと集約的に生産手段のとれる別の場所へ移り住んだのであろう。

今回の調査における遺構・遺物は前述のとおりであり、これまでの調査結果とあわせて時代を追って整理し、まとめとしたい。

(1)縄文時代

今回の調査では、縄文時代の遺構として住居址及び土坑を確認した。住居址はいわゆる『おせんべい土器』（木島系土器）をもつ前期前葉に属するものである。当遺跡ではこの時期の住居址が7軒確認されており、大集落を形成していた可能性がある。飯田下伊那における同時期の集落遺跡としては、豊丘村田村原遺跡・喬木村伊久間原遺跡の報告があり、定住をしていたものと考えられている。

現在までに竪穴住居址が確認された位置から集落全体を判断するには、調査位置が少なく資料不足であるが、当該時期の住居址の多くが尾根状微高地の頂上を中心に展開していることから、今回の調査箇所は集落の西縁部にあたるものと見られる。

さらに今回確認した土坑から出土した『五領ヶ台』『諸磯C』併行の土器は中期初頭に属し、当該時期にも生活した痕跡がうかがえるが、それ以外の遺構は確認できず居住域外と判断せざるを得ない。集落の中心は北西側に連続する尾根上の西の原遺跡に求められる。

中期以降になると土器片が多少出土するのみで遺構の確認はなされず、これまでの調査でも竪穴住居址の確認例はなく居住区外にあたるものと見られる。

(2)弥生時代

本遺跡の中心時期である弥生時代後期の竪穴住居址は今回の調査を含めて35軒を数え、方形周溝墓も11基確認したことになる。尾根状に延びる微高地には一定規模の集落が形成されていた。出土遺物から見る限りでは、後期前半の座光寺原式期にはじまり後期全体を通じての遺跡である。中心時期は中島式期である。集落の発展・衰退の状況が窺える。住居址の主軸方向はおおむねN

45°W±15°の範囲内におさまる。ほぼ90°ずれる22号・39号・45号住居址は多少の時期差を持つ可能性がある。しかし、土器を見る限りにおいては、ほぼ同時期であり、時期差があったとしてもごくわずかであろう。

さらに住居址同志が切り合うことなく、方形周溝墓も切り合っていないことから、集落内において家・墓等の配置に一定のルールがあったことが考えられる。

また、主要な生産基盤は尾根東北側に広がる低湿地に求めたものと見られる。この低湿地の幅は約150m、長さ数100mの範囲であり、田井座の集落を一定期間維持し得る食糧の生産域と位置付けられる。その結果を類推する根拠のひとつとして時期決定のできなかった掘立柱建物址建物址の存在がある。おそらくこの建物址は当該時期に属するものであり、住居に隣接して、一定量の生産物を備蓄した倉庫であった可能性が高い。

しかし、この生産力では弥生時代終末期以降の社会情勢の変化の中で集落を維持し続けることなく、そこに居住した人々は、他所への移動という現実に直面したものと考えられる。

本遺跡は、弥生時代後期において、一定規模の集落を形成する当地方の典型例のひとつといえる。限られた時間内で発展、終息という集落の様は高位段丘に展開する弥生時代後期の集落の在り方を考える上で貴重な資料といえ、また、当地方の弥生時代そのものの姿を考える上で重要な意味を持つキーポイントともなるのが本遺跡ともいえる。

(3)中世

本遺跡においては、南東に緩く傾斜する尾根を横切る方向（北東から南西）に延びる溝が何本か見られる。これらは弥生時代以降のものではあり、状況から区画施設と見るのが妥当であろう。これらの溝に区切られた土地が居住区であったのか、生産の場であったのかはいままでの調査結果からでは判断できない。位置的にいえば古代末に伊賀良庄が置かれ、鎌倉時代には北条江馬氏の地頭代四条松尾金吾が居を構えた『とのおか』が伊賀良殿岡地籍にあったといわれる。この殿岡地籍は毛賀沢川をはさみ指呼の間にある。この遺跡がなんらかの役割を果たしていた箇所であることは想像に難くない。今回調査箇所の南東側で以前確認されている溝28・30がこの時代のものであり、さらに今回確認された溝35も含め、今までに確認されている竪穴・掘立柱建物址建物址などが点在しており、なんらかの形での居住域であったことも考えられる。この地を居住域の一画とした場合、主要な施設の存在は確認されておらず、具体的な様相の言及はできないが、周囲に屋敷などの居住施設が存在した可能性も考えられる。

(4)近代

今回の調査において確認した当該時期の遺構は、墓と土を取った跡である。墓は六道銭の入った土壙墓であった。家の周囲に墓を造ることはけして珍しいことではないが、通常はいくつかをまとめてある。１基単独で存在すること自体に意味があるのかもしれない。

この台地の基盤をなすロームはかなり粘質土が強く、家を立て替えるときに壁用の土として、赤土を掘り出してある。決まって、地山の礫が見える辺りで止められている。詳細時期は不明で

あるが、きわめて最近と考えていい遺構である。

当該時期は現在とほぼ同じ地割りが成されていたものと見られ、現在までこの延長上に生活が営まれてきているものであろう。

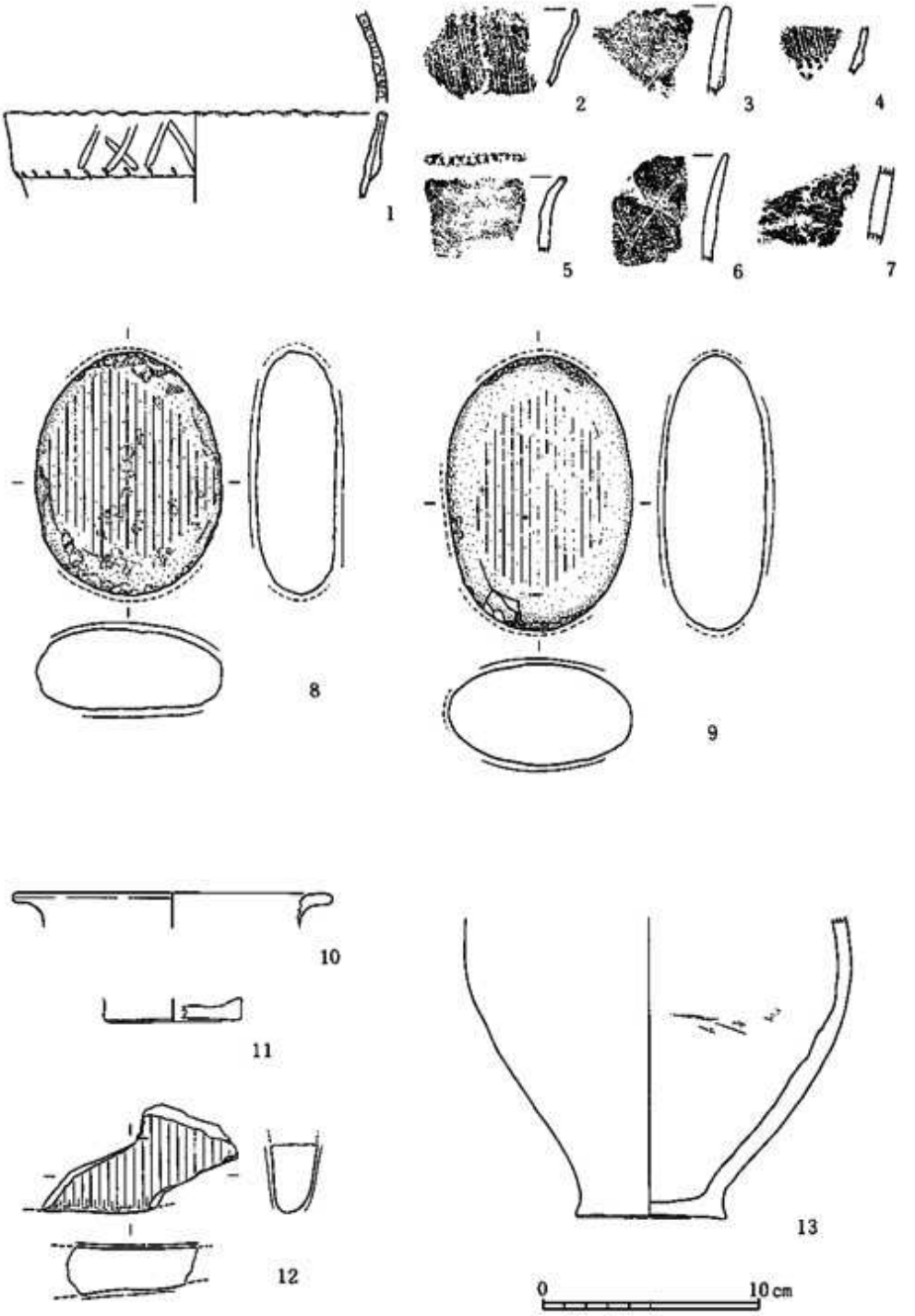
今回までの調査の結果だけでは、当該遺跡の全容を把握することは困難であり、今後周辺地域の調査が進につれさらに確認されるだろう新事実とともに位置付けがなされるものと考える。

最後に、株式会社コナカにおかれましては、文化財保護の主旨をご理解いただき、調査の実施にあたって多大なるご協力を賜りましたことに対し、記して謝意を表す次第です。

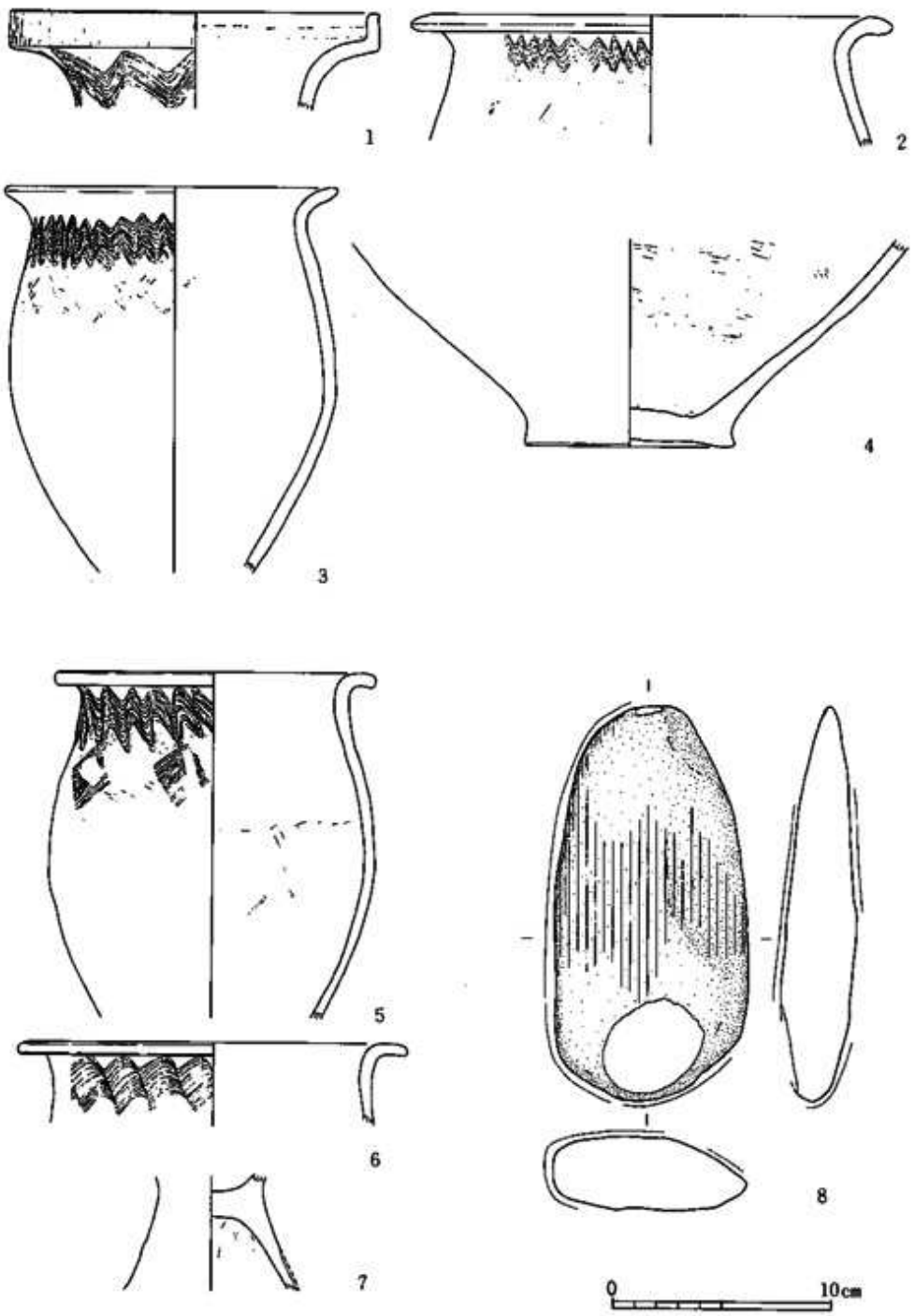
V　引用参考文献

下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第２巻』
下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第３巻』
下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第４巻』
中央道遺跡調査会　1973『中央道調査報告　―飯田地区―　昭和45年度』
中央道遺跡調査会　1975『中央道調査報告　―下伊那郡鼎町その２・天伯Ａ―』
飯田市教育委員会　1980『猿小場遺跡』
長野県史編纂委員会　1983『長野県史　考古資料編』
飯田市教育委員会　1985『町道知久町中村線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書』
鼎町史刊行委員会　1986『鼎町史』　飯田市鼎公民館
飯田市教育委員会　1987『殿原遺跡』
飯田市教育委員会　1989『六反畑遺跡』
飯田市教育委員会　1990『日向田遺跡Ⅱ』
下伊那史編纂委員会　1991『下伊那史　第１巻』
飯田市教育委員会　1991『田井座・一色・名古熊下遺跡』
飯田市教育委員会　1992『田井座遺跡』
飯田市教育委員会　1992『猿小場遺跡』
飯田市教育委員会　1992『矢高原遺跡』
飯田市教育委員会　1992『物見塚古墳』
飯田市教育委員会　1992『柳添遺跡』
飯田市教育委員会　1992『八幡原遺跡』
飯田市教育委員会　1994『日向田遺跡Ⅲ』
飯田市教育委員会　1994『中村中平遺跡』

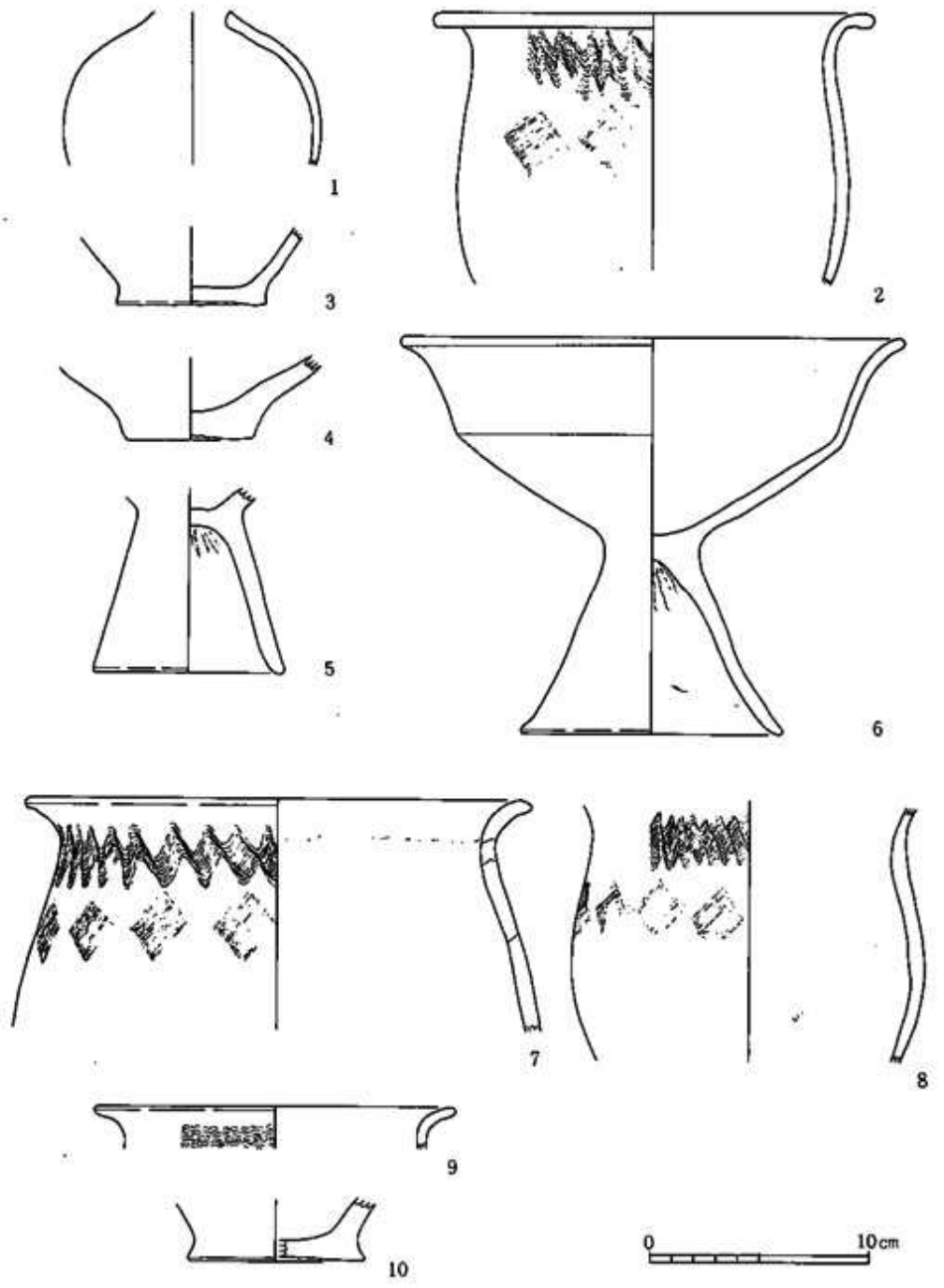
図　　版



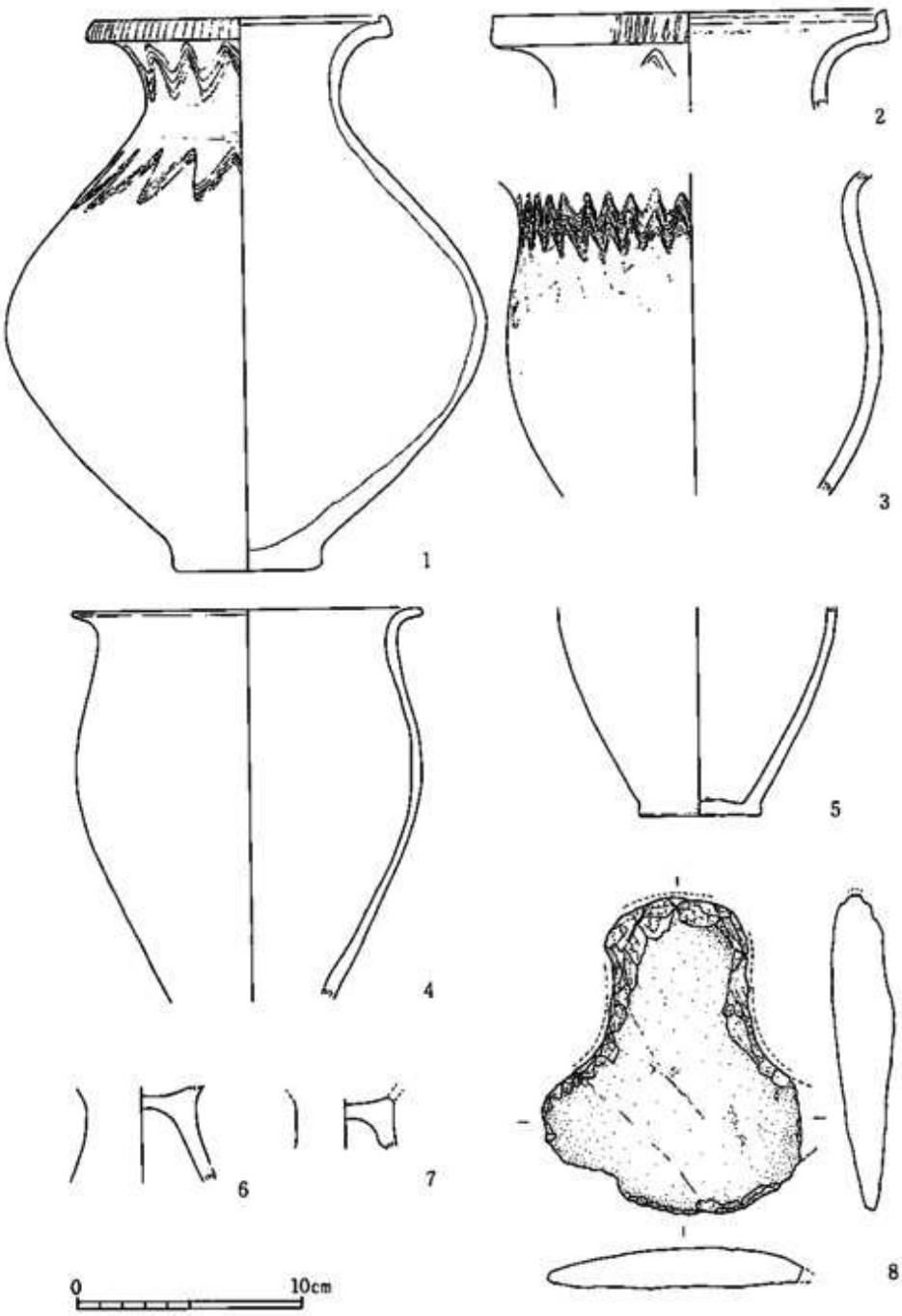
47住・39住・41住出土遺物
(1～9) (10～12) (13)



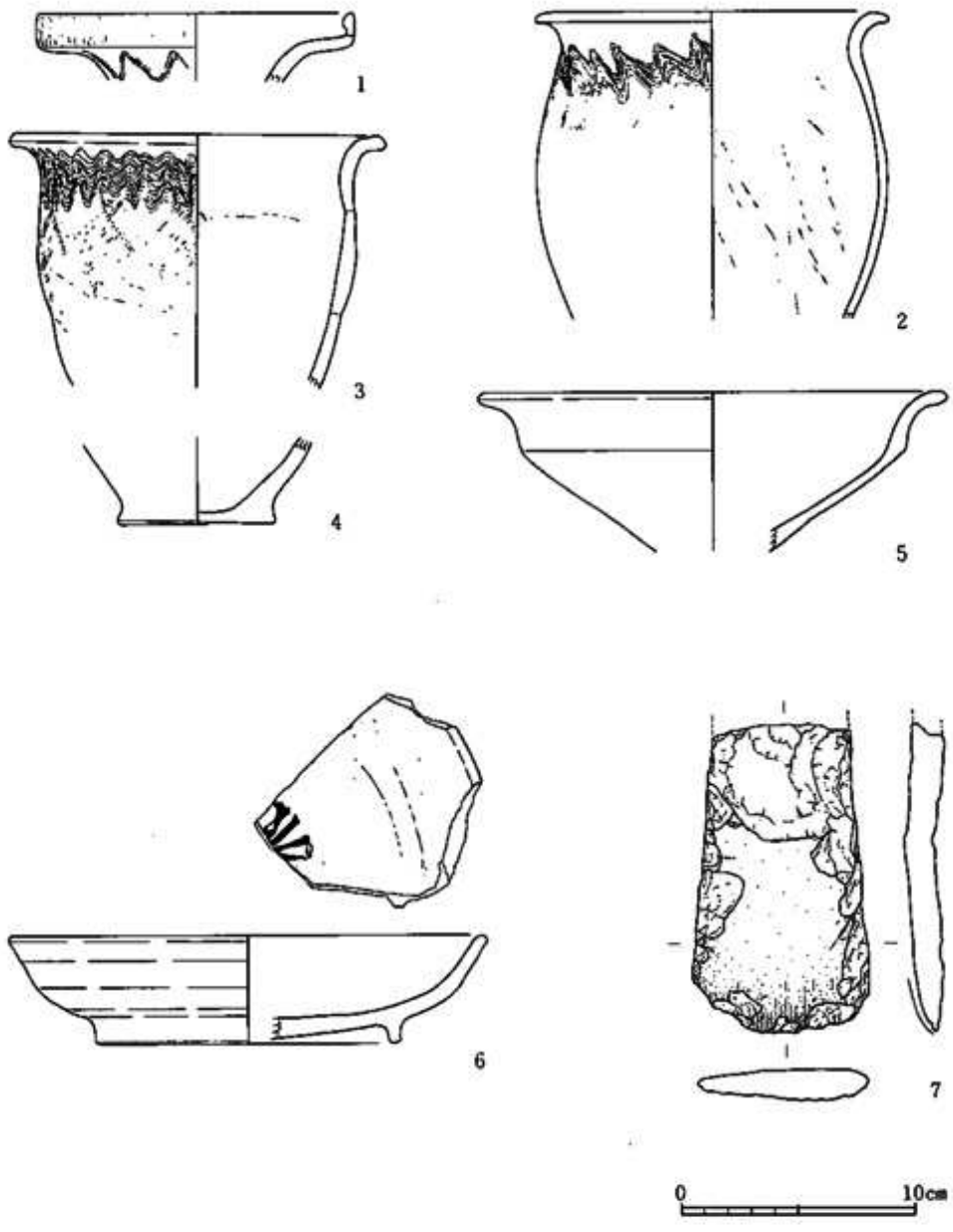
42・43号住
(1~4) (5~8)



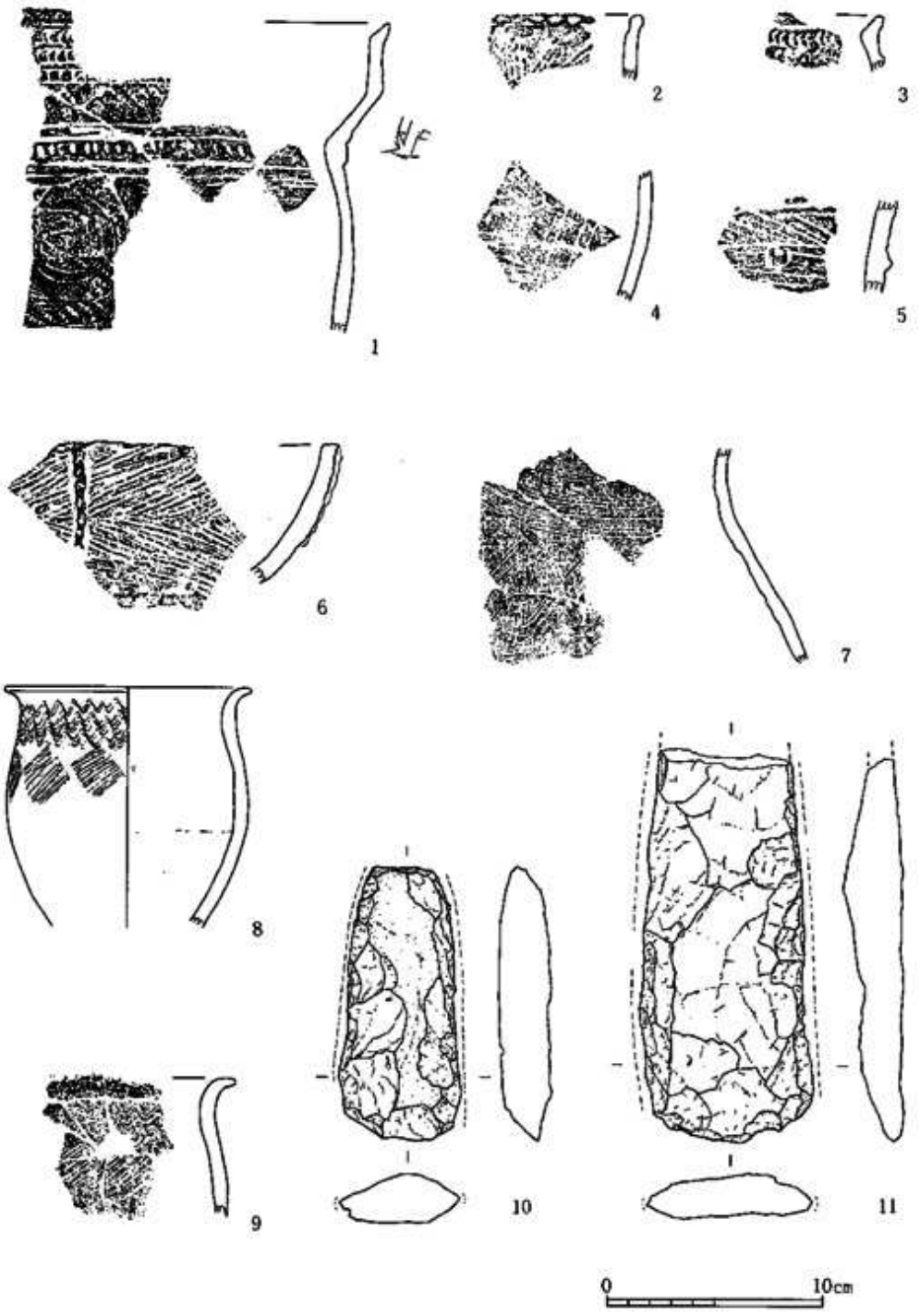
45・48住 出土遺物
(1～6) (7～10)



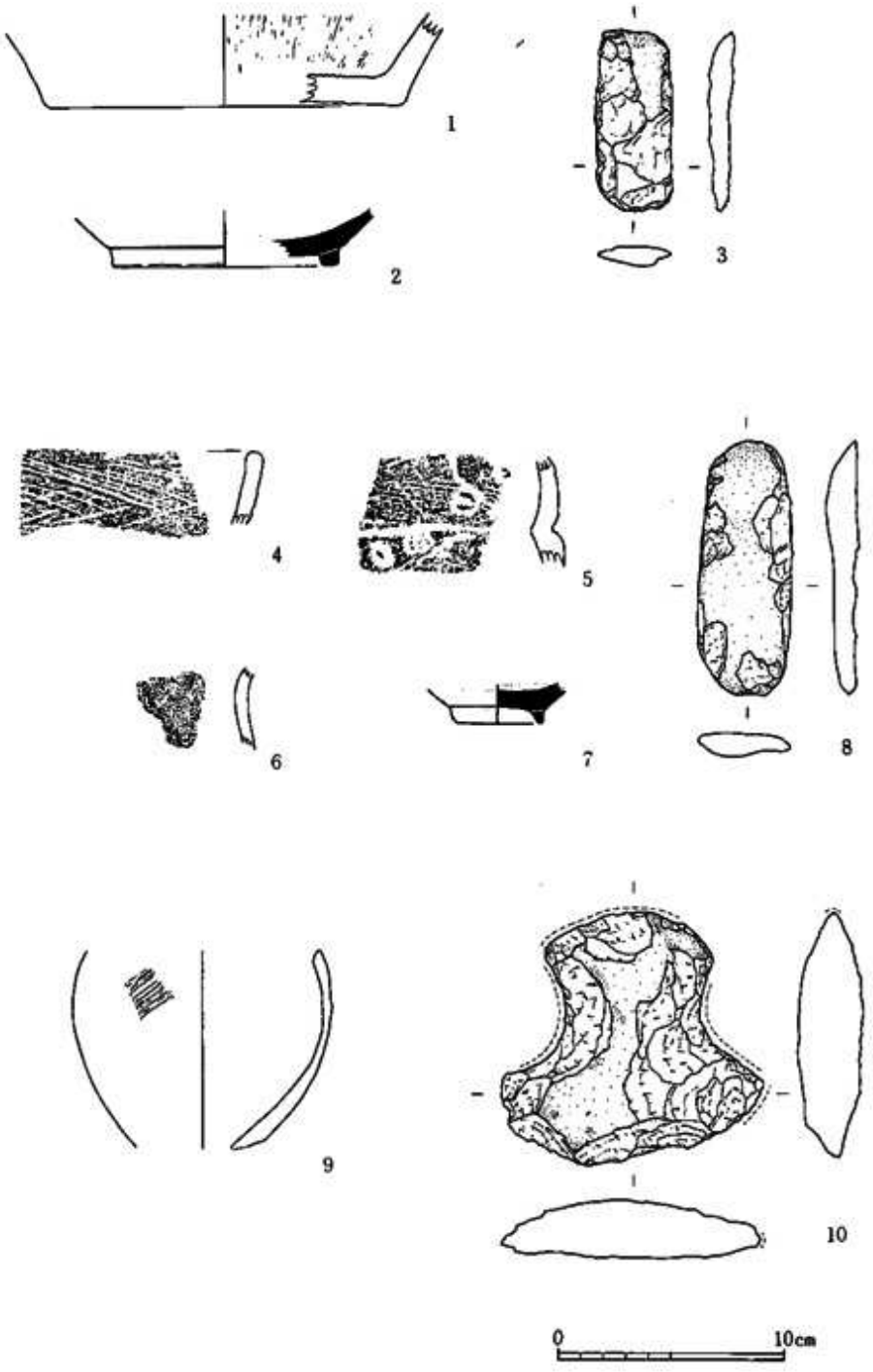
44号住居址出土遺物



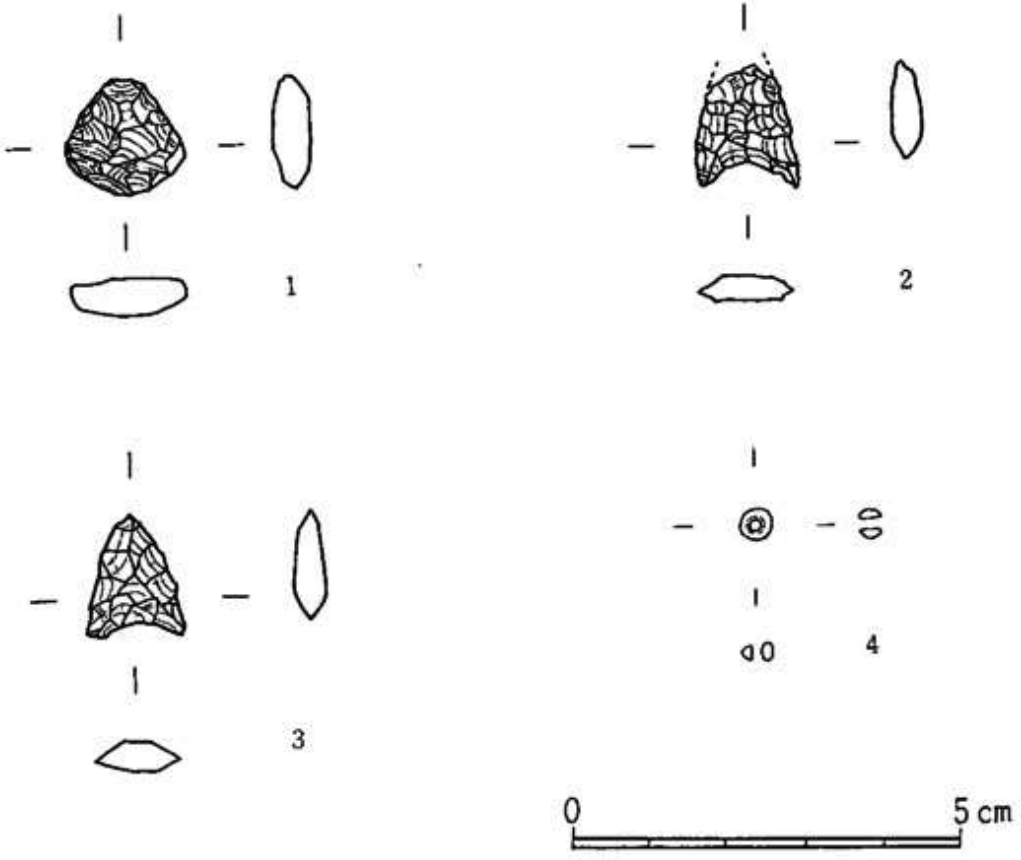
49住　竪穴10
(1～5)　(6・7)



土坑65（1～5）　溝址33（6～11）出土遺物



溝址35（1～3）　溝址37（4～8）　遺構外（9～10）出土遺物



土坑65・69　溝址34・37出土

写 真 図 版

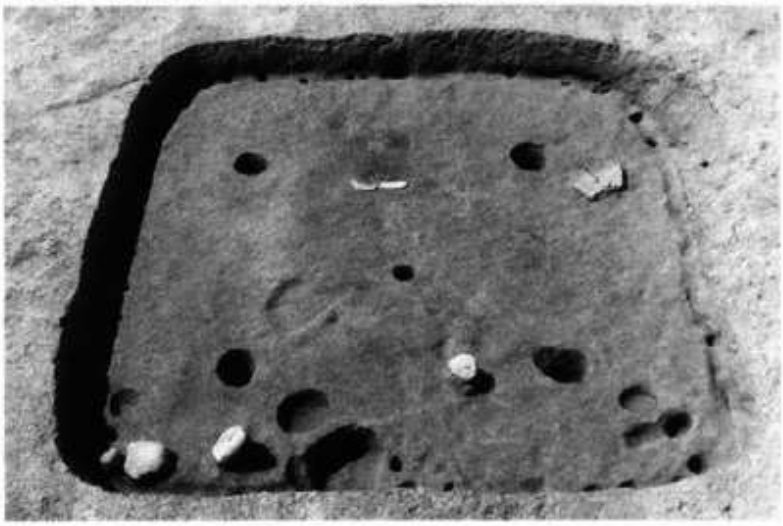
47号住居址

39号住居址

41号住居址

図版 2

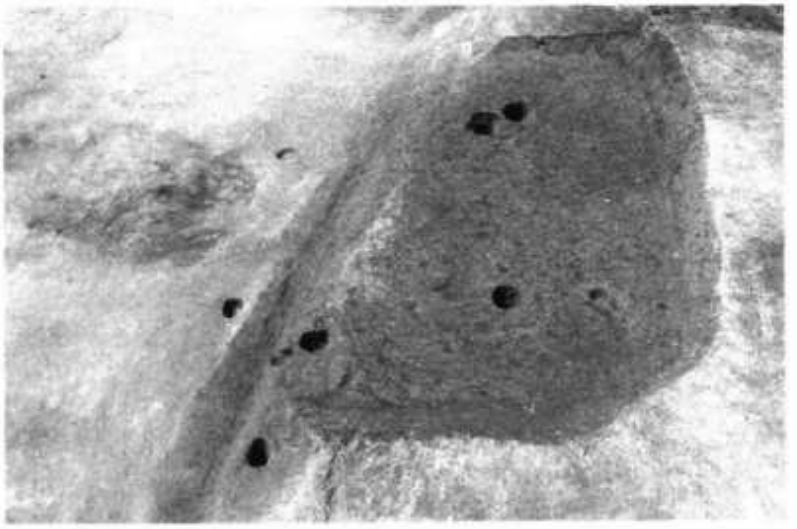
42号住居址



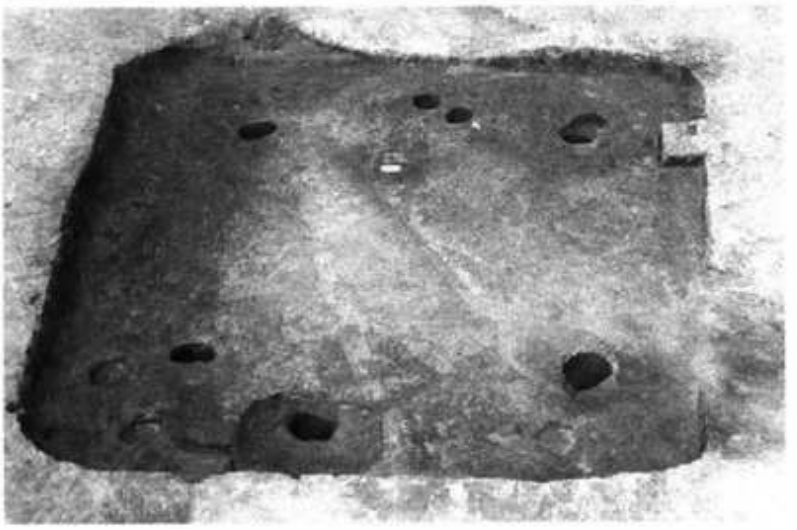
43号住居址

44号住居址

45号住居址



48号住居址



49号住居址

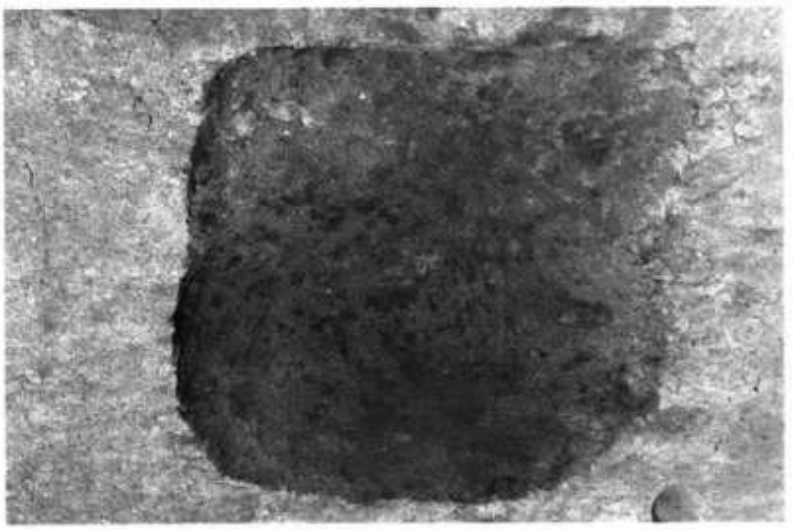
図版 4

掘立柱建物址13

掘立柱建物址14

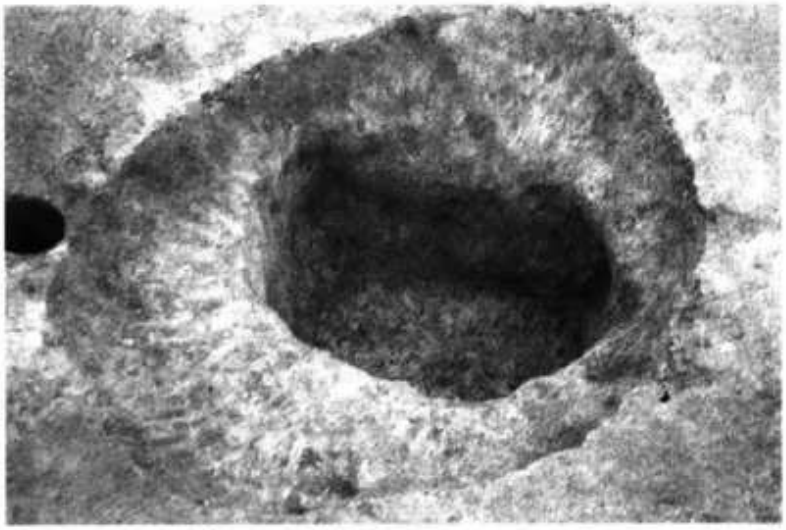
竪穴10

竪穴11



竪穴15

図版 6



土坑63

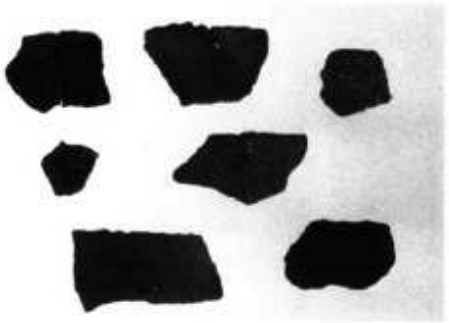
方形周溝墓10

土壙墓 1

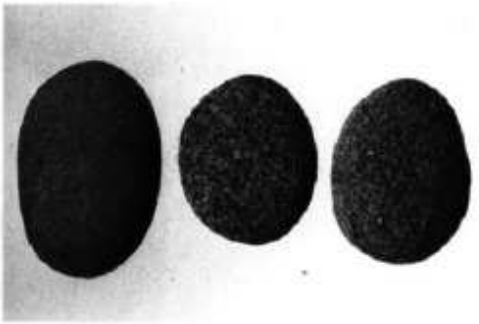
溝址33

溝址34

図版 8

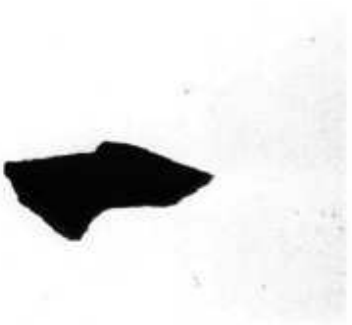


47号住居址出土遺物



47号住居址出土遺物

47号住居址出土遺物



39号住居址出土遺物

42号住居址出土遺物

43号住居址出土遺物

43号住居址出土遺物

43号住居址出土遺物

44号住居址出土遺物

44号住居址出土遺物

44号住居址出土遺物

44号住居址出土遺物

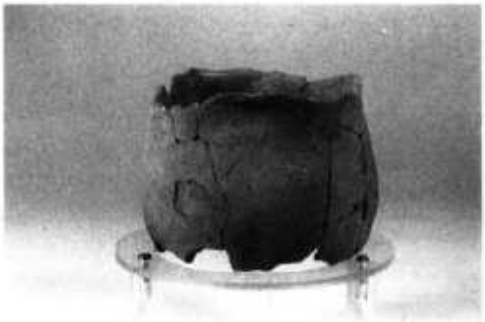
44号住居址出土遺物

44号住居址出土遺物

45号住居址出土遺物

46号住居址出土遺物

図版10



48号住居址出土遺物

49号住居址出土遺物

49号住居址出土遺物

49号住居址出土遺物

竪穴10出土遺物

竪穴14出土遺物

土坑65出土遺物

土坑65出土遺物

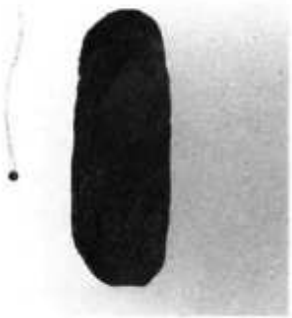
土坑69出土遺物

溝址33出土遺物

溝址34出土遺物

溝址35出土遺物

遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

遺構外出土遺物

図版12

調査スナップ

重機

委託測量

検出

Ⅵ　報告書抄録

ふりがな	たいざいせき
書名	田井座遺跡
副書名	店舗建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	吉川　豊
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395長野県飯田市上郷飯沼3145番地　☎0265-53-4545
発行年月日	西暦1995年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たいざ 田井座遺跡	飯田市鼎 一色 127 他	35° 29' 55"	137° 48' 45"	平成５年 ４月５日 ｜ ４月27日	1,800㎡	店舗建設

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たいざ 田井座遺跡	集落址	弥生時代	住居址　８軒	弥生式土器	飯田市教育委員会 1988.3 田井座遺跡 飯田市教育委員会 1991.3 田井座、一色、名古熊下遺跡 飯田市教育委員会 1991.3 田井座遺跡 飯田市教育委員会 1992.3 田井座遺跡

田井座遺跡（たいざいせき）

店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1995年3月　発行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯田市教育委員会

印　　刷　杉本印刷株式会社